義和拳・清廷・列強

——平原事件から涑水事件にいたる——

村 松 祐 次

一 前稿との連絡

自分がかつて義和團について、小論文「義和拳亂——一九〇〇年——の政治的背景」(一橋論叢、二六・五)、及び「義和團亂の社會經濟的背景」(同、二八・四)を書いて、この動亂が発生し、生成して行つた背後の諸要因を、それぞれの一面から明にしようとした。特に後者では光緒廿三年(一八九七年)、廿四年(一八九八年)、廿五年(一八九九年)の江蘇・安徽・河南・山東・直隸における旱魃及び水害と、それによる飢流民の發生、及びその京津地方への流入が、あだかもこの動亂の擴大と地域的・時期的に表裏して進行しつゝある事實を指摘し、その間に密接な相關關係があるべきことを推定した。又國外の demonetization の進行による銀價の低落、凶作にもとづく食穀價格の騰貴、生計費の膨張、八〇%の銀と二〇%の米から成つてゐる八旗兵丁の給與制度等が錯綜して、窮迫と不満とが次第に農村地帯から都市の内部に及び、それが義和團亂の京津地區への擴大の、少くとも一つの背景にはなつてゐるだろうと推測し

た。しかしそれならばそのような凶作や、飢流民の發生や、都市住民の不滿や動搖に促がされて、具體的にはどううにして動搖が直隸と京津地區とへ擴がつて行つたか。その擴大の三つの指標をなす、平原・肥城・涑水の諸事件は、それぞれにどのような經緯と關連とにおいて繼起したか。それがこの小稿で取上げようとする先ず第一の點である。

しかし實はこの小稿で明かにしようとするも一つの點がある。それは前稿でふれたような外國勢力の進出や、凶作・貧困・不滿・動搖とならんで、事態をそれほどにまで擴大させた原因の中に、中國の天下國家の思想や、その中の官僚の生態が、どんな關係をもつだろうか、と云うことである。諸事件の經過を出来るだけ史料的に跡づけながら、この點についても考えて行きたい。先ず第一には、平原事件の經過からはじめよう。

二 平原事件とその影響

前稿でふれた沂水教案から約六ヶ月の後に、山東省平原縣で起つた平原事件につき、當時同縣の知縣で、親しくこの叛亂の鎮壓に當り、又その結果知縣事の職を失なつた、蔣楷の書いた「平原拳匪記事」⁽¹⁾によると、光緒廿五年の三日十四日（一八九九年四月二二日）、蔣楷が莒州から平原へ赴任した當時、平原縣から中國里で二十五里の距離にある恩縣の附近には、義和拳の演練が盛に行われていた。「三月十四日上事ス。聞ク、恩縣ノ四境、盛ニ義和拳ヲ行ウト。或ハ云ク、冠縣ノ十八團ヨリス、或ハ云ク、東昌・曹州ヨリ（來ル）ト。其ノ底細ハ詳カニスベキナシ」と云うのが、着任直後に蔣楷の受取つた情報であり、又光緒廿五年六月廿八日（一八九九年八月一日）附で、吳橋の知縣、勞乃宣が

出した一上申書は、「査スルニ山東ノ冠縣ハ、直（隸）省ト界ヲ交ユ。該處ニハ既ニ義和拳ノ名目アリ。直省ニモ亦此ノ項ノ拳棒ヲ演習スルモノ無キヲ保シ難シ。應ニ一體ニ查禁スベシ」云々と記しているから、⁽³⁾勿論A・H・スミスが言う通り、どこからどこへ擴がつて行つたのかは、容易に確かめ得ないにしても、この頃北部山東一帯に、義和拳の演練が、擴まつていたことだけは確かである。それはすでに前稿でくりかえして援引した、清（徳宗）實録の光緒廿四年四月四日（一八九八年五月二三日）の條の記事と對應して、⁽⁵⁾山東直隸の交界にあるこの地方が、義和拳發生の中心地であり、又その後もこの地方を中心に、その勢力が擴大しつゝあつたことを推定せしむるものであらう。⁽⁶⁾

蔣楷の着任の直後、同じ年の四月（陰曆四月一日は陽曆五月十日に當る）のはじめに、縣下に一二の民・教紛争の小事件があり、この地方にいたカソリック宣教士、高鳳儀からの抗議や告發を通じて、蔣楷は附近の義和拳の主動者が、武生張澤、同じく武生王治邦、その子武生王甲三、魏奉宣等であることを知つた。⁽⁷⁾ 彼等は平原縣と恩縣とを隔てる馬頰河の北堤を中心にして、夜間拳技を練つて早曉に散じた（夜聚明散）と言うから、當時尙主としては、附近の農民が郷村の紳士・領袖を中心にして集まり、農耕の餘暇に拳技を演練して、⁽⁸⁾ 教士・教民に對抗しようとしたものであることは明らかである。しかも彼等は、蔣楷が例えば王甲三に向つて、「民ガ教案ヲ以テ忿ヲ洩サバ、彼ノ族（外國人、キリスト教徒）ハ即チ教案ヲ以テ畔ヲ啓ク。前年ニハ鉅野ノ案起リテ、教堂十三處ヲ増シ、去年ハ沂州ニ案起リテ、日照・莒州・郟城ノ城中皆教堂ヲ建ツ。然レバ且ツハ我ガ咽喉ニ據リ、且ツハ我ガ膏肓ヲ腴ル。滋事ノ犯ハ卒カニ亦駢首シテ戮ニ就キ、教民ニ於テハ毫末モ損スルナシ。自カラ損スルコトノミ多シ。民間或ハ未ダ知ラザラン。紳董ニ在イテ之ヲ警覺セヨ」と説諭し、又、「符・呪ハ妖人ナリ。符・呪ヲ以テ民ヲ惑ワスハ、邪教ナリ。邪教ハ必ラス叛シ、

妖人ハ必ラズ亂ス。亂スレバ則チ斬リ、叛スレバ則チ滅ボス。汝ニ身家アリ、教匪ノ邪術ヲ信ズルコトナカレ」と警告したにかかわらず、依然として練拳をつづけ、修技者に對しては「刀劔モ傷クル能ワズ、槍砲モ入ル能ワズ」と號して、聲勢洶々たるものがあつた。⁽⁹⁾

當時の拳技演練の様様や、これに隨伴する咒術の形式については、かつて市古宙三氏が述べられたが、當時すでに拳民が演拳咒拜のための特定の場所として、「拳廠」をもつていたこと、拳技演練と言つても、必らずしも赤手ではなく、戈や矛のような舊式兵器は元より、小銃や小砲をも備えていたこと、楊戩その他の傳統的・道教的な「神」を祀り、靈媒者である「馬子」として少年を參加せしめ、護符を發行し、咒文をとなえしめたこと、すでに縣外にあつて專業化した義和拳法の「大師兄」、朱紅燈（李文成）の影響下にあり、明年は「劫年」であつて、玉皇大帝が諸神を降下せしめるであらうとて、間近くせまつた動亂の必然性を豫言するような下生説を擴散せしめたこと等、種々な點で明かに、中國古來の宗教的祕密結社である、教門會黨の定型に從つて、擴大する傾向を示しつつあつた。⁽¹¹⁾

蔣楷は縣下四十六里の里長を集めて、左道（呪術）の信すべからざること、聚衆の律の犯すべからざること、民・教元一如なること（後段參照）を説諭したが、外部からの影響もあり、八月（一日は陽曆九月五日に當る）には商家廟で、教民王附有を莊長王朋玉・莊長曹玉琢・張澤・魏奉宣等が襲撃し、「門窓ハ剝落シ、箱籠ハ欹倒ス」と言う狀況を示現せしめ、ついに王附有の老父を衝撃死せしめた事件が起り、さらに仲秋（陽曆九月十九日）前後に到つて、教民に對する襲撃・略奪の事件が相次いで四方に起り、年齢七十歳餘の岡子李莊の里長李長水の如きは、他地方から徒黨を招集して衆に示し、「鐘ヲ撞キ鼓ヲ伐チ」、「敢テ大言ヲ爲シ、私ニ名號ヲ立ツ」と言うような、反官的行動に出たの

みならず、八月廿一日（十月二日）恩縣の要請によつて、省城濟南から馬隊が派遣せられるや、九月五日（十月九日）朱紅燈と俗稱せられる李文成を岡子李莊に招き、又高唐・荏平・長清等の州縣から、黨與二三百人を同村に集めて、これを棚・圈等の隊伍に編成し、鄆落の周圍に散開せしめて、素朴な陣地を構築し、九月七日（一〇月一月）逮捕に向つた蔣楷等に抵抗し、一時これを敗退せしめた。⁽¹²⁾

これに對して隣縣恩縣の知縣は、動亂の自縣への擴大を恐れて、九月十日（一〇月一四日）歴城の令秦應達に派兵を電請したので、濟南の知府は統領袁世敦と共に、馬隊を率いて同村に到つた。又恩縣の馬隊もこれと協力して、九月十四日（一〇月一八日）、拳民と森羅殿村に戦かゝり、馬頰河の河畔にこれを挾撃したので、拳民は大旗一面、大砲二尊、小銃十餘桿、刀矛それぞれ百餘點を遺棄し、李文成の弟をふくむ廿七人の戦死者を出して四散した。⁽¹³⁾

しかし山東の巡撫毓賢は、拳民の力を借りて、洋教を斥けようとする、義和拳の同情者であつたから、平原縣が義和拳を追究したことを喜ばず、九月廿一日（一〇月二五日）蔣楷を撤任せしめ、又袁世敦をも革職せしめた。⁽¹⁴⁾當然にこの地方における義和拳の動きは、これによつて二度急速に活潑化し、九月末には李文成（朱紅燈）は明朝の遺裔と稱して起ち、本明和尚なる者と共に、洋樓を焼き、教民を襲ひ、毓賢の與えた「保清滅洋」の大旗を掲げて、高唐・荏平の間を横行した、と言われる。「教案史料編目」（本節註三参照）が、主としては徐家滙天主堂刊行の史料によつて、「（光緒）廿五年、荏平縣治八百六十餘莊（ノ中）、拳ヲ習ウ者多キコト八百餘處ニ到ル」と言つてゐるのは、恐らくこの頃のことかと思う。朱紅燈と本明とが、統領參將馬金鉞に捕えられた後にも、高唐の人王立言が、これに代つて教堂・教民を槍劫し、各村落に割死して馬を供出させ、教民の子弟を掠質して贖を求むる場合にも、馬を要求して馬隊

を練成した。

だから濟南・東昌・曹州の三府、濟寧・臨清の二州を通じて、西部山東一帯には、「拳匪數十起シ、每起數百人、教民ハ皇々トシテ安セス。賄ヲ以テ免ルル者ハコレアリ」と言う狀況になつた。しかも毓賢を長とする山東省當局はこれを傍看し、「州縣(省ニ)兵ヲ請エドモ發セズ、稟ヲ(巡撫ニ)上ツレドモ批セズ」、ために州縣以下の地方官も、多くは毓賢の意を體して、拳亂の彈壓に積極的ならず、或は拳民に賄絡して、自縣を「擾サザルコトヲ求ムル」か、或はこれを放置して、「ソノ肆擾ニ任セ」たから、山東西部及び北部の動搖は、益々激化した、と蔣楷は言うのである。⁽¹⁵⁾

蔣楷だけではない。當時の外國人側の史料を見ても、この時の山東省當局、特に毓賢の行動が、拳亂を擴大せしめるのに與つて力あつたとする見解は、枚舉に暇がない。當時恩縣近傍の教會の宣教士として、事態を凝視していた A・H・スミスが、一八九九年の十月こそは、義和拳民の熱狂が一段と昂まつた turning point であり、その責任は全く毓賢が山東巡撫として、當然に果すべき義務を怠り、森羅殿村における拳民に對する勝利を、もう一步押しすすめて、これを完全に剿滅することなく、却つて袁世敦等を處罰して動搖を擴大せしめた所にある、と記しているの⁽¹⁶⁾は、そのただ一例である。毓賢は間もなく光緒廿五年十一月四日(一八九九年二月六日)、アメリカ合衆國の駐清全權公使コンガア(Edwin Conger)や、同じくドイツの公使ケテルル(Clements Freiherr von Ketteler)が總理衙門に加えた執拗な壓力によつて、罷免せられた。⁽¹⁷⁾又後に山西の巡撫として教士・教民の殺害を命じた所爲もあつて、光緒廿七年一月(朔日は一九〇一年二月一九日)には、新疆に流され、遂に斬られた。いづれも彼が外國人側から、義和拳亂擴大の第一の責任者だと、見られていたことの結果である。

一體毓賢と義和團の關係は、どのようなものだったのだろうか。毓賢が假に義和團を援助し、これを育成したとすれば、それはどのような環境と心情とに基づくものだったのだろうか。この點については節を改めて、立返つてふれることにし度。

(1) 「平原拳匪紀事」は中國史學會編、「義和團」、(一九五一年、北京、四冊)の第一冊、三五三—三六二頁に收められてい

(2) 同右、第一冊、三五三頁。

(3) 「稟遵飭出示禁習義和拳嚴密防範並送示稿由」、「義和團」、第四冊、四六〇頁以下收載。

尙「教案史料編目」は、その「山東教案、光緒廿六年」の條で、徐家匯天主堂から公刊された「格知益聞匯報」(参照することが出来なかつた)の光緒廿五年一四二號、光緒廿六年一五二號、同一五三號に關係記事があることを指摘しつゝ、「(光緒)二十五年在平縣治八百六十餘莊、習拳者多至三百餘處、拳首朱紅燈、與僧人心誠、率徒燒毀禹城・在平・博平等縣法教堂」と述べている。在平・博平共に恩縣や平原の南西至近の距離にある。動搖は急速にこの附近一帯に擴大しつゝあつたものと見なくてはならぬ。

(4) A. H. Smith; "China in Convulsion", 1902, 2 vols, Vol. I, p. 153.

(5) 拙稿「義和拳亂—一九〇〇年の政治的背景」(一橋論叢、二六・五)七八頁。

(6) 因にそれは約四十年前以前、咸豐十一年(一八六一年)には、「拳棒」をよくした貧しい豆腐賣り宋景詩が事を起した中心地でもあつた(北大史料研究所「宋景詩史料」一五—二六頁)。

(7) 「光緒廿五年」四月初、天主教士高鳳儀來函。言「武生張澤殿、張安業」事。安業澤兄子、素凶橫、鄉里不齒、因置之。

鳳儀復自禹城來見言、「張澤與魏奉宣等、聚堤上不逞子弟、夜練義和拳、已擾小魏莊兩教堂。小屯武生・王治邦實爲之首。……小魏莊民宅有教士往來愈息所、耶蘇像微裂、什物多毀。出錢給地保、令爲修補。」〔平原拳匪紀事〕、同上、第四冊、三五三頁。

(8) 「而召王治邦之子武生王甲來城、語之……甲三大省悟、歸語其父。爲調入其間、而堤上小魏莊之案以結、然而根株未絕也。……張澤・魏奉宣自得甚、夜聚明散、聲勢洶々。自謂刀劍不能傷、槍砲不能入、試之有斷臂者洞胸者、然以爲其術之不精也、練如故。論者謂當事實際主之。……堤上與恩縣隔河、恩縣人謂之北提。平原有拳匪、自此起始。」

(同右、同上書、第一冊、三五三—四頁)。

(9) 前註參照。

(10) 市古宙三、前掲論文、「義和拳の性格。」

(11) 「嘗遣人廉其廠。廠前橫大刀一。大刀會所以名也。亦有槍、有砲、有戈、矛之屬。」

「其神以楊箴爲主、謂之「太老師」、其次則孫臏・馬武・張飛・孫悟空等。神之所附、謂之「馬子」。馬子之歲、率二十上下。其術、有符、有咒。符加於頂、或佩身畔。則若瘋、若癩。力大尋常數倍。」

「其說、則謂明年規年。玉皇大帝命諸神下降。其黨相呼以「師兄」、呼其渠(巨)、爲「大師兄」。渠姓名爲「朱紅燈」、或曰荏平人、或曰長濟李家莊人、其號謂之「天龍。」(前掲「義和團」第一冊、三五四頁)。なおここに蔣楷が義和拳の拳廠に、大刀會とのシムボルとしての大刀がかざられていたと報告していることは興味ふかい。それは前稿でもふれた通り、義和拳と大刀會とが、しばしば重復した成員をもつ異名同體的存在ではなかつたかと推察せしむるのである。或はすくなくとも、沂州や兗州のような山東の南部にはじまつた大刀會(この點につき A. Smith: "Convulsion etc." Vol. I, p. 155 を參照)が、山東北部における義和拳の成立に、重要な關連をもつことを示すものでないかと思う。なお當時の史料に、大刀會と義和拳を併置して

いる記載は決してすくなくない。その一つは一八九九年十一月十五日、ベルリンから発信せられて、山東における平原事件以後の、治安の動搖の注目すべきことを述べた Viscount Gough から Marquess of Salisbury 宛の書簡である。(Blue Book: China, No. 1 (1900) p. 368, 史料番號四〇一)

(12) 「九月初五日、李金榜來報、李長水往延匪首朱紅燈、在高唐、茌平・長清等州縣、鳩黨二三百人、重到岡子李莊。……初七日、率勇役數十人往捕。途次劉姓・セ姓又報被擄。各兩人一行抵捉狐屯、聞拳匪愈聚愈衆、十數人住一棚、環莊外且徧。督勇役賈勇前進、比至則匪衆已成列逆拒。……其初出、向東南叩頭、其令以鼓。其黨有和尙、有道士。其隊以四人爲一團、輪伏輪進、其人皆外來、其中多游勇、故嫻於戰事。……匪衆且悍格、勇役寡不支、遂退。」(平原拳匪紀事、前掲「義和團」、三五六頁。)尙義和拳の徒黨に外來の流氓、特に失業軍人が多く混入していたことについては前にもふれた。(前掲拙稿「義和團亂——一九〇〇年——の政治的背景」八三頁。)なほ「平原拳匪記事」は後段で、討伐に向つた濟南知府が、丞尉廣文をして岡子李莊のことに通曉した者を民間に求めさせた時、衆人みな「見百姓可也。誰與匪習者。諭土着猶可也。誰與外來之匪習者。」とて、徧問するも皆應じなかつたことを記している。(同上書、「義和團」第一冊、三五八頁。)併せて團衆中に外省人の多かつた一證となし得るであろう。もつとも同時に蔣楫は同書の九月十三日の條(三五八頁)に、「至捉狐屯、日昃矣。方生來言、朱紅燈與二三百人、去此、未之見。見其頭目四、皆恩縣人」云々とも記している。北部山東人が衆中特にその指導者に少くなかつたことは勿論だと言えよう。

(13) 「義和團」第一冊、三五九頁。

(14) 蔣楫の「平原拳匪紀事」に據る。A・H・モースの前掲“China in Convulsion”第一卷の記載を、H. B. Morse; “International relation of Chinese Empire” Vol. III, p. 177 が殆ど丸々に符合する。尤もモースの記事は上海の新開 North China Herald の一八九九年十月四日、十一日、十六日、二十三日に載せた“Correspondence from “North Western

Shantung", Corresp. "Ichow-fu", Corresp. "Tientsin" 等に據るものであることが註記に見え、その一部、特に山東西北部からの通信は、恐らくミスミス自身の筆になるものであらうから、この二書の記述が符合するのは當然かも知れない。又「平原拳匪紀事」を書いた蔣楷は、何よりもこの事件の處理に起因し、毓賢によつて罷免せられた後、むしろこのことに激せられてこの書を著したのであるから、その記載には毓賢に對する強いビヤスがあることも豫想せられなくもない。しかしだからと言つて、故田保橋潔教授の説の如く、毓賢の影響を甚だしく過少評價すること（後段四ノ註七参照）は如何であらうか。蔣楷やモースと同様の見解が、當時なほ他の史料にも散見していることは、例へば「教案史料編目」一二四頁の記事や、王其渠編「有關義和團輿論」〔義和團〕第四冊、一七一頁以下）等に照しても明らかである。又李希聖「康子國變記」〔義和團〕第一冊、三七頁）、「景善日記」（同上五九頁）、佐原篤介・浙西樞樞輯「拳事雜記」（同上二六二頁）、劉孟揚「天津拳匪變亂紀事」（同上、第二冊、七頁）等をはじめ、當時の筆記、雜録で同様の趣旨を述べたものは無數にある。

(15) 「義和團」第一冊、三六〇—三六二頁。

(16) "China in Convulsion", Vol. I, p. 167—168.

(17) ヨンガアは一八九九年十二月七日北京發の「宛書簡の中」"As you will see from my note to the Tsungli Yamen, I have, without demanding it, suggested the necessity and propriety of his removal, and I am glad to report that yesterday General Yuan Shih-kai, of the imperial guard, was appointed acting Governor..." と言つてゐる。毓賢罷免の原因は明かに外部からの壓力にあつた。（"Foreign relations of U. S." 1900, p. 77—8.）尙同文書集の同年分、七九—八四頁、九三—九七頁の諸文書を参照せよ。田保橋潔「義和拳亂と日露」（史學會「東西交抄論」下、一〇五〇—一〇六頁）もくわしくこれにふれてゐる。ヨンガアと共に毓賢の罷免に與つて力があつたと言われるケテルの行動は、義和團關係獨逸側文書を集めた "Die diplomatischen Akten des Auswärtigen Amtes 1871—1914, Bd 16, Die China Wirren und die

三 清廷の教案に對する態度

さて前稿でもふれたように、義和拳民に對する山東省當局の處置が、「緩慢」だつたのは、何も毓賢の巡撫だつた時だけではない。毓賢に先立つ張汝梅の時でも、毓賢の後を襲つた袁世凱の場合でも同様である。山東省當局だけではない。後述するように清廷自身の態度が、外國人側から言えば常に不満の種子であつた。高壓的な調子で、一舉に排外反教活動を絶滅せよと迫る外國人側が満足するほど、強力で徹底的な彈壓を加えることは、當時の宮廷や官僚には不可能であつた。勿論單に物理的な力の有無や大小の問題だけではない。むしろそのような力を用いることの制度的可否、或は「民心」の歸趨にかかわる社會的是認の問題として、彼等にはそうすることが事實上出来なかつたのである。

その場合勿論當時の國際情勢や、國內事情をも考慮しなくてはならぬ。これは前稿ですでにふれたことではあるが、當時列強からの政治・經濟的壓力は、いよ／＼強く感ぜられつつあつた。この年のはじめにはドイツが日照域を占領し、三月には清廷に、「モシ果シテ、(ドイツが)一味蠻横ナラムニハ、固ヨリ事々忍讓シテ、底止スルトコロ無カラシムルヲ得ズ」と言わせ、六月にはイタリヤが三門灣の租借を強要して、しきりに示威のための軍艦を黃海に送り、十月十九日(十一月二日)には、清廷に「嗣後モシ萬己ムヲ得ザルノ事アツテ、戰ニ非レバ局ヲ結ブ能ワザル者ニ遇イ、モシ業ニ宣戰ヲ經バ、萬議和ヲ行ウノ理ナシ。各省ノ督撫、必ラズ須ラク同心協力シ……敵ニ克チ、果ヲ致セ」ト諭

令させた⁽²⁾のである。當時列強の對中國進出は、單に商業的なそれをこえて、先ず中國の領土を半ば封鎖的な、「勢力範圍」に分割し、その中で鐵道・鑛山その他の利權の開發と、これに適應する政治體制の形成維持を行なおうとするものであつた。そのことは勢力範圍設定に立ちおくれたアメリカの國務長官ヂョン・ヘイが、イギリス・ドイツ・ロシア・フランスの諸國に向つて、光緒二十五年八月二日（一八九九年九月六日）、所謂中國の「門戶開放」と、中國への「經濟的」進出に對する「機會の均等」とを申入れたことからも明らかである⁽³⁾。當然にそのような列強の進出は、清廷の態度をも硬化せしめた。モースは沂水事件に際しては、北京宮廷は一八九九年五月、袁世凱の兵五千五百、聶士成の兵七千五百、董福祥の兵九千を動員した、と報告している⁽⁴⁾。この年の十月、對イタリア關係の緊迫に際しては、たしかに清廷は袁世凱に動員を命じて、山東に向わしめた⁽⁵⁾。前稿でも述べたように、この年の春から秋にかけては、中國の國際政治關係が、特に山東省を中心にして、異様に緊張した一時期であつたのである。

それだけではない。外國人と中國人キリスト教徒に對する、中國官民の反感はいよいよ昂まりつつあつた。山東の奥地に對するドイツの開發活動、アメリカ・イギリス・イタリアの宣敎活動の活潑化に伴なつて、民教紛爭事件は各地に頻發した。ドイツ人が即墨で、文廟（孔子の廟）の聖像を破毀し、その建物を轉用した場合⁽⁶⁾のように、關心が禮教的・文化的だつた場合もある。同じくドイツ人が膠濟線の建設のために、土木工事をはじめたことによつて、高密周邊で耕地の水利狀況が悪化し、農民がこれに抗議して蜂起した例⁽⁷⁾のように、主としては經濟的理由による場合もある。又平原事件に見られるように、或は經濟的な、或は習俗の差異による、小紛爭が累積して、一般的な反感を醸成し、特に從來そのような農村地帯の紛議の調停に當つていた、郷紳や領袖に對して、中國人キリスト教徒が信服せず、

ややもすれば宣教師の後援をたのんで、舊慣を無視する行爲があつたのに對し、郷紳達、村の武生や莊長達を中心に、次第に農民が排外國體に集結して行つた場合も多かつたのである。

他方同じ頃の山東は、流民の増加に惱み、その一部は光緒廿四年の三月（一八九八年四月）すでに、「沂州府屬ノ流民、逃荒ニ假托シテ、沿途ニ食ヲ乞イ、稍々意ヲ遂ゲザレバ、衆ヲ恃ンテ兇ヲ逞ウス⁽⁹⁾」と言ふ通り、暴動化の傾向を示して居り、しかもこの年は二度當時の上奏が、「登、萊・沂・青の四府、春間亢旱ニシテ、二麥歉收、七月ノ間ニハ（蝗）蟲禾稼ヲ喰ツテ淨盡シ、糧價昂貴ス。餓殍籍ヲ枕ニシ、倒斃途ニアリ。目前スラ此ノ如シ、冬ヲ經テ春ニイタラバ、（慘情）何ゾ設想スルニ耐ニシ」と言ふ通り、慘澹たる凶年であつた。當時のアメリカ公使コンガアがこの年の十一月五日（十二月七日）に、ジョン・ヘイに送つた一書翰の中で、「今收獲期の作柄は凶作に有之。乾魃により收獲量は激減仕り。大なる貧困と缺乏とは一般化致し、結果として略奪は、異常なる規模において行なわれ、外國人とその從信者とは、自からこれによる悲嘆の、より大なる分け前を、割り當てらるることと相成り。と言ふ通り⁽¹¹⁾、それは又同時に排外反教運動を激化させる要因でもあつたのである。

しかしそれならば、そのような帝國主義的な列強からの壓力、國內の經濟的諸情勢、及びその不可避的な組合せに因る、排外風潮の激化が、そのまま民教紛争事件に際して、當時の清廷を動かし、山東省の官僚を動かす、支配的なモティヴになつていたか、と言へば、必ずしもそうではない。先ず清廷の態度を見れば、少くとも當時の上諭にあらわれた限り、民・教紛争事件に對する清廷の態度は、何よりも中立的である。一方では決して外國人側の高飛車な要求に應じて、直ちに拳民を武力で彈壓し盡そうとはしない。しかしだからと言つて大刀會や義和拳を是認し、教

民の保護をしない、と言うのではない。教民も、非教民も、又つながら「天朝の赤子」であるとして、公平・平等に取り扱おうと言うのが、教案事件に對する、清廷の基本態度だつたようである。

例えば沂水教案に關する、光緒廿五年二月二十一日（一八九九年四月一日）の一上諭は、「張汝梅ニ著シテ、夏辛酉ニ即行電飭シ、隊ヲ帶ビ沂境ニ馳赴シ、嚴ニ彈壓ヲ加エシメ、地方官ヲ會同シテ、實力モテ教民ヲ保護シ、釁ヲ滋カラシムルコト勿レ。モン造謠シテ教民ヲ驅逐スルヲ以テ由トナシ、事ヲ生ゼント希圖スルノ人アラバ、即行嚴拏シテ、重キニ從ツテ徵辦シ、德（獨）人ヲシテ朝廷ノ一視同仁、民・教ヲ論ズルナク、皆保護ニ歸セシムルモノナルコトヲ知ラシメヨ⁽¹²⁾」と言つて、明らかに會徒の彈壓を命じている。又その數日後にも、張汝海に電命して、「近來山東ノ民・教不和、亦實ニ（地方官が）教民ヲ虐待シ、以テ彼ガ恨ヲ含ミ、事ヲ籍リテ風ヲ生ズルヲ致ス、等ノ情事アルコトヲ免レズ。……各州縣ニ淳諭シ、剴切ニ士民ニ曉諭シ、入教ノ人モ同じク朝廷ノ赤子ナルコトヲ知ラシムベシ⁽¹³⁾」と言つて、地方官に中國人キリスト教徒の庇護を命じている。

勿論この同じ上諭が、その後段では、「従前ハ平民教民ヲ賤視シタルニ、後ニ迫ンデハ彼強ク我弱ク、教民日ニ鷓強ナルヲ見、郷里ニ横行シ、良民ヲ魚肉トス。……嗣後詞訟アルニ遇ワバ、仍チ一律ニ持平辦理セヨ。」⁽¹⁴⁾と言ひ、又當時別の一上諭は、「民・教皆良莠齊シカラズ⁽¹⁵⁾」⁽¹⁴⁾と言ひ通り、教民の中にも、郷曲に横行し武斷する無頼や暴民が少くなかつた。又他の一上諭が、「各省の教堂偶マ毀タル所アレバ、華人ノ教士ニ充ツル者、往々ニシテ喉使勾串シ、動々モスレバ鉅款ヲ求メ、基ダシキハ數十百萬ニ至ル。以テ賠款愈々多クシテ、教堂愈々添イ、教案亦之ニ因ツテ、疊起スルヲ致ス。種々轆轤シ、需索シテ厭クナシ⁽¹⁶⁾。」⁽¹⁶⁾と言ひ如く、中國人の宣教士にも、反感をそそる行動ははなはだ多かつ

た。しかも清廷はこれに對して、少くとも平原事件の當時まで、決して一面的な敵意を表明せず、あくまで中國人教士や教民を、天下國家の臣民として均一に取扱ひ、むしろこのことを通じて、ややもすれば彼等が主張する、治外法權的、半外國人的な地位を、認めまいとした、とさえ考えられるのである。勿論清廷が教民の保護を命じたのは、あくまでも彼等も又、天下國家の臣民であつて、臣民としては非教民と、同等のステータスを認めらるべきだ、とするものに過ぎなかつたから、外國人及びキリスト教徒の立場を中心とし、簡明直截に排外運動を抑止禁斷せよと迫る、外國人側の一方的見解との間には、大きな差隔があり、埋め難い虚隙が存した。しかも必らずしも直ちに排外的な紳士や拳民の立場を是認して、これを保護しなかつたものでは決してなかつたのである。

反面から言ふとそのように實力による、教民の保護を命じて居り、又嘉慶以來の義和教門に對する禁令⁽¹⁶⁾や、會黨的・聚衆煽惑的な行動に對する嚴律があり乍ら、清廷の義和拳に對する態度は、決して單純に禁壓的ではなかつた。そのよい例證は、例えば袁世凱に對する清廷の上諭である。袁世凱は新軍の統領として、その練成した西洋式軍隊を率いて山東に入り、毓賢が罷免せられた後、彼に次いで山東の巡撫になつた。前にもふれ後に又詳述するように、毓賢の罷免は平原事件における彼の態度を不満とする、アメリカや獨乙からのかなり強い干涉の結果であつた。又清廷も毓賢を罷免する直前の一上諭に、「軍機大臣ニ諭ス。近ゴロ聞ク、山東地方ニ、大刀會・紅拳會(等)、各種ノ名目アリ。多クハ不逞ノ徒ニ係ワル。開教ヲ籍リテ名トナシ、結黨橫行シ、良善ヲ欺壓スレドモ、地方ノ文武(官僚)、彈壓・緝捕俱ニ力ヲ得ズ。巡撫毓賢、又成見ヲ固執シ、以爲エラク教民ト爲難スル者ハ、即チ良民ニ係ルト。意存偏袒ヲ免レズ。此ノ如クニシテ因循日久シケレバ、必ラズヤ事端ヲ滋生セシ。該撫身封圻ニ任ズ。事ニ遇ワバ總テ須ラク

持平辦理シ、患ヲ未萌ニ消スベシ。豈一己ノ名ヲ沽ルヲ得テ、大局ヲ不顧ニ置クベケンヤ。著シテ即チ所屬ノ文武官員ヲ督飭シ、各種會匪ノ名目ヲ查明シ、嚴ニ禁止ヲ行ナワシメヨ。儻シ敢エテ前ニ仍ツテ聚衆シ、開教ヲ籍ツテ名トナシ、結黨滋事セバ、並ニ著シテ嚴ニ從ツテ懲辦シ、以テ地方ヲ靖カラシメヨ⁽¹⁷⁾」と言フ通り、毓賢の義和拳に對する態度を、寛大放任に過ぎるとして、袁世凱に交替せしめたのである。

しかも清廷はこのようにして着任した袁世凱に對して、決して一舉に拳民を彈壓し去ることを期待していない。少くとも彼の着任直後與えられた上諭には、或は「各屬ニ嚴飭シテ、民教ノ案アルニ遇ワバ、持平辦理セシメ、徒ニ兵力ヲ恃ンデ、民心ノ惶惑ヲ轉致スベカラズ」と諭令シ、或は「一意剿撃シテ、(拳民ヲシテ身ヲ)挺シテ險ニ走ラシメ、大禍ヲ激成スルコトアルベカラズ⁽¹⁸⁾」と言つて、むしろ武力の使用と過激な彈壓とを、きびしく禁止するのである。當然に袁世凱は外國人側の期待を裏切つて、はかばかしい拳民の禁壓を行なわなかつた。⁽¹⁹⁾

平原事件で罷免せられた蔣楷や袁世教の例を見ても、當時の實録が、「人アツテ一摺ヲ奏ス。之ニ據ルニ、山東平原縣境内ノ民・教事ニ因ツテ紛争ス、教民蠢役ニ賄事シ、妄ニ村民ノ謀變ヲ報ズ。該署縣蔣楷、遽ニ飛稟ヲ行イ、兵ヲ請ウテ彈壓シ、以テ管官虛實ヲ察セズ、兵ヲ縱テ槍ヲ開キ、並ニ虜掠ノ情事アルヲ致ス、等ノ語アリ。近來各處ニ教案屢出ス。全ク地方官ノ操縱、法ヲ得ルニ頼リテノミ、方メテヨク患ヲ未萌ニ消サシ⁽²⁰⁾」と言ひ、又「署平原縣蔣楷、事ヲ辦ズルニ謬妄、幾ンド大禍ヲ醸セントス。著シテ即チ革職ヲ行イ、永ク絀用セズ。營官袁世教モ、行爲孟浪ニシテ勇(丁)ヲ縱ツテ民ヲ擾ス。一併革職ス。」⁽²¹⁾と記録している通り、全く「過早」に派兵を請ひ、「不必要」に武力を用いた、と言ふことを理由に、この嚴辭に遇つたのである。袁世凱が外國人を失望せしめること明らかであるに

拘らず、決して武斷的な處置に出なかつた理由は、何よりもそのような清廷の、基本的な態度に順應したものだ、と見るべきであろう。

舊中國の天下國家的傳統の下では、「華・夷ノ別」の感覺はたしかに鋭敏であるが、しかしその華と夷を分つものは、中國的禮教、或はむしろ王朝的支配への歸順の有無なのであつて、中國の統治に服し、中國の禮教に服するものは、均しく「天朝の編民」、つまり中國の天子の臣民として、同一の status を與えられ、或は強制せられた。勿論中國人キリスト教徒を、中國の禮教に遵うものとなし得るかどうかには、多少問題があると思われるけれども、清朝自身の上諭等において示した態度は、明らかにこれを無視し、超民族主義的・天下國家的に、臣民の範圍を彼等の上まで押しひろげて考へている。だから民・教を問はず、「一視同仁」だと言ふ意味の言葉は、その後もくり返し上諭その他にあらわれる⁽²²⁾。そして勿論或る時期には拳民の彈壓と教民の保護とが強調せられ、或る場合にはむしろ拳民への同情と教民の規制とに重點が置かれる、と言ふような變化はあるにしても、このような超然主義・中立主義は、涑水事件頃までの清廷の民教紛争事件に對する態度を、一貫する基調になつてゐる、と言へると思ふ。だから清廷の態度は一方では外國人側の見解と同調し得ず、從つて絶えずその深い不滿を引き起しただけでなく、これと對立する拳民や大刀會の黨與とも、必らずしも立場を同じくしてゐなかつた。そしてここに、元來は排外反教の方向をもち、「扶清滅洋」のスロオガンを掲げけるものとして出發した拳民の動きが、やがて反清的、「滅滿興漢」的な傾向のものに轉化する可能性も、孕まれていた、と言へるのである。

そして平原事件の經過はかなりの程度までこの傾向を顯らかに示した。例えば李文成や李長水は、前述のように黨

與を集めて武裝し、陣地を構築し、「戰書」を送つて、清朝の官兵に戰を挑んだばかりでなく、李文成は和尚本明（復明と意味のつながりがありそうな名である）と共に、「明裔」を稱して各地で蜂起を組織しようとした。「前朝ノ遺裔」を稱すること、特に異民族王朝の下で、前漢人王朝のかくれたる子孫であると稱して、叛亂者が自己を權威づけることは、鈴木中正氏が指摘する通り、元代以來の易姓革命暴動の常套である（23）。前稿でもふれた通り、清廷の義和拳に對する態度は、平原事件の頃を境にして、著しく警戒的になり、強硬になつた。そのことは前に掲げた、毓賢を責めた一上諭（本節註一七参照）などからも親がえる。しかも清廷の態度は、その後も依然として、必ずしも武力によつて一舉に義和拳を撃滅することは、意圖しないものの如くである。一方では教門會黨に對する嚴律の存在を絶えず諭令しながらも、他方ではかつて市古氏が指摘した通り、「會ト不會ト」を論ぜず、「匪ト不匪ト」を論ずる、と言つ、安協的實際的な態度を取りつづける。又前掲の袁世凱に對する上諭の後段には、「總ジテ操縱ノ妙ハ、平時ニ在リ。地方官果シテ衆情ノ服スル所トナラバ、事ニ遇ウモ自ズカラ、大ヲ化シテ小ト爲シ、有ヲ化シテ無ト爲スコト難カラザラン」と言い、又「惟ウニ目前ノ辦法ハ、總ジテ患ヲ未然ニ弛ルヲ、第一ノ要義トナス。……袁世凱ニ著シテ機ヲ相シテ法ヲ設ケ、慎ミテ又慎マシメヨ」とも言うのである。つまりそこには事態の重大さを警戒すればするほど、タクトレスな武力による彈壓を認めず、むしろそのような彈壓の結果として、「大禍」（つまり叛亂の擴大）を醸成することが怖れられていた、と言えるのである。

そのような清廷の態度を、どう説明したらよいのか。恐らく次のような諸點が考えらるべきであらう。

1 中國の社會構造の中には、教門・會黨的なものを存立せしめる根強い傾向があり、特に當時は上述したような、

國際的・國內的な諸情勢に基づいて、排外反教的な祕密結社の勢力が、きわめて廣く、かつ深く、山東の都市と農村とに浸透擴大しつつあつたこと。

2 恐らく舊中國の天下國家理念の、最も基本的な前提に基づいて、王朝支配者は「民心」の推移に對し、極度に神經質で、ティミツドであつたこと。

3 一般に舊中國の徳治主義的傳統の中では、官僚による統治は、専門化され技術化された合理的行動としてではなく、むしろ全人格的な悦服、又は「衆情の歸服」に基づくものと考えられていたこと。

當時教門・會黨、特に義和拳や大刀會の影響が、州縣の官兵の間にまで深く浸透しつつあつたことは改めて説くまでもあるまい。假に清廷が彈壓を決意し、巡撫がこれを嚴命したとしても、その實行は容易でなかつたにちがいない。加之舊中國の王朝權力は、その權威を天命によつて基礎づけ、又この天命の推移を、民心の歸趨に顯示せられるものと考へることによつて、一方では人民の政治的權利に對し、何等の民主主義的考慮をも拂うことなしに、一方的な權力行使をなし得た反面、そのような天意を顯現し、従つて傳統により革命行動を是認されている民衆の輿論に對しては、極度にティミツドであつたのである。加うるに舊中國の徳治主義的傳統は、一方では武力による威壓よりも、説得や悦服を重んじ、しかも一般に對人關係における、相手の心情に對する深い暖かい思いやりや、それに基づく慎重な行動を、何ものにもまして尊重せしめたのである。ここに清廷が一方では、義和拳の擴大が、恐るべき外交的紛糾をもたらすだろうと言う、コンガアやマクドナルドの「警告」の、重大さを理解しなかつたわけではなく、又義和拳の運動の反王朝活動への轉化の危険を、慮らなかつた譯ではないのに、尙かつ之に對して、一舉に武斷的な處置を取

り得ず、事態を遷延した理由があつた、と言わなくてはならない。

所で清廷が袁世凱や毓賢に、民教紛争事件に際しての「持平辦理」を命じ、「衆情の悅服」や、その爲の「操縱の妙」を要求する場合、どうすることが「持平（公平に）」なのか、どうすれば衆情が把めるのか、何が操縱の「妙」なのかは、具體的・客觀的には全く示されていない。一定の徳目にかけて、特定の手續が要請せられているのではなくて、漠然と儒教的文人としての官僚が、その人格的な影響力を通じて、個々の民人の心に、孝順歸服の感情を呼び起し、結果的に有事を化して無事となし、「患ヲ未萌」に消滅せしめることが、求められているのである。だから當時の官吏、特に地方官には、例えばその地方の教門・會黨活動に對して、實に大幅な自由裁量の餘地を認められていることになる。反面から言えば祕密結社の形成や、これへの大衆の煽惑を、法に従つて非情に、機械的に、彈壓し去ることは、決して許されない。そこには極めて中國的な、一つの政治・社會倫理が窺われる。そして清廷がそのような、傳統的態度を以て山東省の巡撫に臨んだことは、ここでの問題である平原事件を境とする、義和拳の擴大に、極めて重要な關連をもつた、と考へてよさそうである。たしかに比較的單純な、武斷的保守主義者であり、當時の民間における排外的な風潮や、これも宋以來の傳統に基づく「忠」とか「烈」とか言う社會的價値の前に、「一己ノ名ヲ沽」ろうとするヴァニテイや野心も強かつた毓賢が、義和拳の存在をむしろ承認し、同時にこれを通じて彼等を操縱し規制しようとしたことも、無理でなかつたように見える。しかしその結果は重大であつた。義和拳は次第に叛亂化し暴動化した。そしてその重大さは、次にふれる肥城事件によつて、一層深刻なものになり、新らたに國際的外交上の紛糾に轉化しようとするのである。

- (1) 實錄、光緒二十五年三月二日（一八九九年四月二日）條。
- (2) 同右、光緒二十五年九月十九日（一八九九年十一月二日）條。
- (3) 衆知の如く、ヘイの申入れは、それ等の各國に、それぞれの勢力範圍 (spheres of interest) 内における、他國民の通商・投資活動に對し、門戸の開放 (open-door) と機會の均等 (equality of treatment) を、公式に保證する聲明を要求したものと見た。 (FRUS, 1899, p. 129, No. 927, Mr. Hay to Mr. White; p. 131, No. 205, Mr. Hay to Mr. Choate; p. 140, No. 82, Mr. Hay to Mr. Tower.) それは單に清國の立場からのみならず、西歐列強中の（立遅れた）一國から見ても、當時の中國を圍る國際的事情が、如何に危機的なものに見えたかを、明らかに示すものである。ヘイがドイツ、イギリス、ロシアに送つた正式の書面には、單に sphere と言う言葉を使つてゐるが、その旨をフランスに内報して、その門戸開放宣言への參加を求めた書簡 (FRUS, 1899, p. 128, No. 664, Mr. Hay to Mr. Vignaud) は、*はきりと territorius held by them in China と言ひし。*
- (4) "International relations," Vol. III, p. 175.
- (5) 實際、光緒二十五年一〇月一九日（一八九九年十一月二日）條。それはイタリイ軍艦の示威行動に對處しようとするものであつた。「又自三上月以來、意大利兵船多艘、游弋烟台等所、殊爲巨測。東海邊防尤應三及三時籌備。著三袁世凱、酌三撥到部各營、選三派得力將官、統三帶操演行軍隊、先赴德州、迨遶而前、繞三往沂州一帶地方、相三機屯紮。隨三時操演。……」間もなく袁世凱を統賢に交替せしめたのも、これによつて山東の防備を強化する意圖をふくむものであつたかも知れない。
- (6) 「都察院奏。山東舉人孔廣容等、呈控德人殘三毀卽墨縣文廟聖像。……人心共憤。請三飭卽查三辦、以全三國體。給事中張仲忻奏、德人無禮特甚。衆怒難三平。請三嚴行三查問。下三所司三知之。」(實錄、光緒二十四年閏三月七日條)
- (7) 同右光緒二十五年二月二〇日條、「電三寄袁世凱、電悉。高密百姓抗三阻德人修路。固應三嚴拏懲辦。惟聚三衆已至三兩旬。……」

…設遷延日久、徳人竟以兵至、多傷民命……著該撫迅速相度情形、妥籌辦理……」。

(8) 後にもふれるが義和團の中に郷紳の勢力が加わつてゐたことは例へばモースも、沂州府からの一八九九年十月四日附の Correspondence に基いて、次の如くに言つてゐる。"The officials in all the disturbed region seemed sympathetic to the Boxers, or culpably negligent, or at the best helpless, and the raiding went day after day, the raiders being systematically shielded by the gentry". (International relations, vol. III, p. 177.) 教俗の差異による反目は屢々經濟的な利害につながつた。例えばキリスト教は偶像崇拜を禁ずるから、中國人キリスト教徒は、儒教的な祖先祭祀や、儒道教的な村の祭に参加せず、従つてその爲の村の附課金に應じない、等々。

(9) 實錄、光緒二四年閏三月一日(一八九八年四月二一日)條。

(10) 同右、光緒二五年九月一二日(一八九九年十月一六日)條。

(11) Foreign relations of U. S. "Ibid. p. 77, No. 289. Mr. Conger to Mr. Hay (Leg. of U. S., Peking Dec. 7, 1899.)

(12) 實錄、光緒二五年二月二一日條。

(13) 同右、同、二月二五日條。

(14) 實錄、光緒廿五年二月廿六日(一八九九年四月六日)條。

(15) 同右、光緒廿五年六月十二日(一八九九年七月十九日)條。

(16) 勞乃宣「義和教門源流考」(「義和團」IV、四三三頁以下)。

(17) 實錄、光緒二五年一〇月二六日(一八九九年十一月二八日)條。但し後に明らかにするやうにこの上諭は、義和團の動搖が、臨清・高唐等アメリカ人宣教師の活動地區へ波及したことに基つき、アメリカ大使コンガアからの猛烈な抗議の末、ついに "I trust your highness and your excellencies will fully appreciate the gravity of the situation and send such

imperative order by telegraph to the Governor and other officials as will compell them instantly to use such forcible means as will forthwith disperse those threatening rioters and protect the life and property of these people. If it is not done, and done at once, life and property are sure to be destroyed and great trouble and annoying complications result." (from Conger to Tsungli Yamen, Nov. 25, 1899. Peking. FRUS, 1900, p. 78) と云へ、ほとんど脅迫に近い警告に應えて出されたものであることも、つけ加えて置かなくてはならぬ。

(18) 同右、光緒二十五年十一月二四日(一八九九年十二月二六日)條。同、十一月二七日(十二月二九日)條。

(19) 袁世凱の赴任ははじめ外國人側から大に期待せられた。外國人側は一般に開新的だとの評判あるこの新軍の統領が、直ちに拳民を彈壓するものと信じたのである。(例えば FRUS, 1900, p. 78, Conger to Hay, Dec. 7 を見よ。)そしてやがて大に失望した。彼が全然はかばかしい武力行動を行わなかつたからである。(H. B. Morse; "International relations." Vol III, p. 188) 袁世凱に過早な武力行使をする氣があつたかどうか疑わしい。しかも彼は時には一意武力にたよつて、事端を滋げからしめていると密告せられたことさえある(實錄、光緒二十五年十一月三日—一九〇〇年一月三日條)。すぐれた機會主義者であつた袁世凱が、簡単に外國人側の期待に副つて、彈壓を試みるはずはなかつたのである。(尤も袁世凱は決して無爲に日を過したのではない。前にふれた Steiger; China and the Occident は、袁が作つて廣めた禁拳四字詩の譯を擧げている。)

(20) 實錄、光緒二十五年十月一日(一八九九年十一月三日)條。

(21) 同右、十月十八日(十一月二十日)條。

(22) 例えば實錄、光緒二十五年二月二十六日(一八九九年四月六日)條、同二十六年一月二十日(一九〇〇年二月十九日)條、同二月十八日(三月十八日)條を見よ。

(23) 愛知大學刊、鈴木中正「清朝中期史研究」第三章、白蓮教とその性格(九七—一四一頁)を見よ。

(24) 市古宙三「義和拳の性格」。尙次節を参照せよ。特に光緒二十五年十二月四日(一九〇〇年一月四日)の上諭が、「匪ヲ爲スト」否とを論じて會と不會とを論ずるな、と諭令したことは、後述するようにやゝこしい紛議のきつかけになつた。

(25) 一證據のみを擧げる。實錄、光緒二十五年十一月二十四日(一八九九年十二月二十六日)條。「各處會匪、名目甚多。有興中・安清道反・袍哥・天地・哥弟・三合・三點・大刀・小刀等名目、潛匿各省。而營伍廢弛、兵辯或有入會者。捕役印冊、匪徒亦有含混掛名者……」。山東省の官兵の中に大刀會の興黨がその半を占めていたらしいことは、將格もこれを述べている。

四 肥城事件と列強の干渉

所で毓賢は光緒二十五年十一月四日(一八九九年十二月六日)に、來京陸見を命ぜられ、同日工部右侍郎袁世凱が、彼に代つて山東巡撫に署せしめられた。⁽¹⁾ 袁は十月十九日(十一月十一日)の命令で、すでに部隊を率いて山東に進駐して居り、⁽²⁾ 事態は外見的にはなだらかに運んだように見えるが、裏面にアメリカとドイツ、特にアメリカ公使コンガアの壓力の加わつていたことは、前述の通りである。光緒二十五年十一月五日(一八九九年十二月四日)、コンガアは北京から、本國の國務長官ジョン・ヘイに書簡を送つて、山東省における動搖の擴大を報じ、中國の宮廷と官僚との「不能率又は不誠意」を指摘した。前節にふれた如き、清廷と山東巡撫との態度は、彼には全く理解しがたいものだつたからである。⁽³⁾ そして彼は憤懣にたえない事情を一層明かにするために、この書簡の同封文書として、濟南、臨清、高唐、德州に居るアメリカ人宣教師からの求援電報や、それに基づいてコンガアが總理衙門と取交した、往復諸文書の寫しを添附した。それ等は今 F R U S の一九〇〇年分七七頁以下に、文書番號二八九、及びその同封文書第一乃至十六と

して収録せられていて、平原事件から肥城事件へ、山東における動亂が急激に活潑化した情態を、生々とするのである。

先ず添附文書第一號は、光緒二十五年十月九日（一八九九年十一月十一日）、米大使館員スクイアズ（Squires）から、總理衙門にあてた口上書（note verbale）である。それは德州のアメリカン・ボオド・ミッシュンから、その南東三十哩にあるカソリック教堂が、拳民（Boxers）により襲撃せられたと通報し來つたことを述べ、總理衙門に向つて、直ちに山東の巡撫に、この地方に在住するアメリカの市民達が、「條約に基づいて當然に享受すべき」、保護を確保するように、電命を發すべきことを要求している。同封文書第二、第三、第五、第七、第九、第十五も、それぞれ十月十四日（十一月十六日）、十月二十三日（十一月二十五日）、同二十四日（二十六日）、二十五日（二十七日）、三十日（十二月二日）、十一月三日（十二月五日）附で、いづれも山東各地からの救援電報を援引し、教堂の襲撃、破壊や、教民に對する殺害、略奪、放火等の情況を指摘し、總理衙門の緊急有效な處置を反復要求するのであるが、たゞ山東の事態の急迫に伴なつて、スクイアズやコンガアの總理衙門宛文書の語氣は、次第に強く、かつきびしくなつて行く。

例えば數度の文書往復の後、十月二十三日（十一月二十五日）には、コンガアは總理衙門にあて、「小官は殿下並に諸卿が、事態の重大性を完全に評價せられ、山東の巡撫及び他の諸官に、緊急の電命を下し、彼等をして直ちに、これ等の脅威的叛徒等を解散せしめ、これ等（教會側）の人々の生命財産を保護するが如き、強力なる手段を遲滯なく取らしめらるべきことを、疑わざるものに有之い。もしかかる處置にして取られず、しかも即刻に取られざるか、生命財産の被害は免れ難く、大なる困難と心を惱ましむる紛糾とを結果いたすべくい。」と書く。又その翌日十月二十四日（十一月二十六日）には、二度高唐において教民に對する略奪が行なわれたことを指摘して、「この官（毓賢）を動かし爲に

は、紋切型の電命 (stereotyped telegram) 以上の、何ごとかを實行に移すこと、必要かと存ぜられ⁽⁴⁾いと諷刺し、更に十一月三日 (十二月五日) には、「かゝる事態を停止せしむべき、何等かの方法は、必らず存すべしと存ぜられ⁽⁴⁾い。もし然らずんば、中國の政府はその完全なる無能力を、承認せざるを得ざらしめらるべし。小官はここに、昨夜の會議において、小官の申述の趣旨をくり返し申⁽⁵⁾い。すなわちもしこの巡撫が、かの叛徒等を統制し、これ等の人々を保護することを、爲さんとせず、又は爲し得ざる場合は、彼を即刻罷免し、そのことをなさんとし、又なし得る何人かを、代つてその職に任ずべきこと、及び……天津におけるよく操練せられたる軍隊の中より、援軍を彼 (後任の巡撫) に送るべきことに有⁽⁶⁾之い。……もし清帝國政府が、これ等の暴徒を鎮壓するため、何等か急速有效なる方法を取らざる限り、外部の世界各國は、中國が故意に、不必要なる……外國人殺害と、中國自身に取りても、最も危局的なる紛争に導くべき重大なる問題を、輕視しつゝありと信ずべき、充分なる理由を與えらるるものと存ぜられ⁽⁵⁾い」とさ⁽⁶⁾え言つて、はつきり毓賢の罷免を、要請するのである。しかしそれにも拘らず、清廷も山東當局も、決して武力行使を急がなかつたことは上述の通りである。且この結果として、コンガアの最後の書翰が送達せられた翌日、十一月四日 (十二月六日) には、毓賢は上述の如く北京に呼び戻され、袁世凱が山東巡撫の職務に當ることを命ぜられた。田保橋潔教授が指摘する通り、毓賢の罷免を要請したコンガアの申し入れは、明らかに清國の内政に干渉するもので、それが毓賢を今までより一層、確固たる排外主義者にしたことは勿論、山東省民間の、外國人及びキリスト教徒に對する憤懣を、いよいよ激越ならしめたことも想像に難くない⁽⁷⁾。

所でこのアメリカ側 (イギリス・ドイツ等も同様であるが) の主張を、前節で述べた清廷の民教紛争に對する基本的態

度と照合すると、それが何よりも外國人の「條約上の權利」を、主張するものであることが注目せられる。教民と拳民とを問わず、等しく朝廷の赤子として、一視同仁視しようとするのが、北京宮廷の態度であつたとすれば、キリスト教の布教や、奥地資源の開發や、それに伴なう外國人の内地進出を、條約上外國人側の享有すべき、法的權利として主張し、外國人及び中國人教民の生命財産の安全の保證を、清廷の國際法的義務として要求しようとするのが、コングア達の立場であつた。兩者の間には、微妙ではあるがはつきりした喰いちがいがあつた。そしてそこから、一方では清廷が、何よりも「大局ヲ維持」シ、紛糾の發生と擴大とを防ごうと焦慮していたに拘わらず、外國人側からも、山東の民間からも、不満は刻々に強まつて行つて、ついに下に述べるような肥城事件を發生せしめ、事態を一段と緊迫擴大せしめることになつたのである。

さて外國人側の不満は、決してアメリカだけが表明したのではない。光緒二十五年十一月二十七日（一八九九年十二月二十九日）、イギリス公使マクドナルド（Claude M. MacDonald）が、總理衙門に書翰を送つて、「もしこの無秩序にして強力に（vigorousity）鎮壓せられざる場合は、國際的な紛糾の發生も豫期せらるべく也」と、「警告」したのなぞも、その一例である。⁽⁵⁾そしてあたかもこのマクドナルドの書翰に豫言せられたかのように、そのすぐ直後に山東省南部の肥城縣で、内地傳導教會所屬のイギリス人宣教師、シドネイ・ブルックス（Rev. S. M. Brooks）が殺され、これを契機に、これから後、義和拳に關する事態が、新しい刺激を被り、新しい段階に入るのである。新しい刺激とは何か。列強外交團からの、從來より一層強い、組織的な干渉がこれである。各國の大公使はこれ以後個々の事件について個別的に、ではなく、徐々に「外交團」に集結して、清廷に組織的壓力を加えはしめる。新しい段階とは何

か。この頃から、清廷の内部に、徐々に、ではあるが、義和團に同情的で、諸列強とキリスト教文化とに敵對的な勢力が、段々生長し、やがては義和拳の、公然たる是認・起用・組織と、これを利用しての列強に對する武力行動に、つながる形勢を生ずるのである。しかしその事は又立返つて述べることにして、先づ肥城事件と、これを圍る交渉とにふれておこう。

光緒二十五年の十一月二十九日（一八九九年十二月三十一日）、山東省平陰縣に在任して、宣教活動に従事していた英人、S・M・ブルックスは、友人とクリスマスを過した泰安縣から平陰に歸る途中で、武装した中國人の一團に襲われ、拉せられて肥城縣下の一村、毛家舖に到り、脱走を企て、捕えられ、立木に緊縛せられた上、誡首殺害せられた。⁽⁹⁾ブルックス襲撃の報導は、イギリス公使マクドナルドには、十二月二日（一九〇〇年一月二日）、英蘭傳導教會のビショップ、スコットを通じて齎らされ、清廷にも同日先づ襲撃の報導があつた後、十二月四日（一月四日）袁世凱からブルックス殺害のことが電奏せられた。⁽¹⁰⁾そしてこれに對し同日に發せられた清廷の上諭は、寡見の範圍では義和拳に關してははじめて、「各國ノ傳教ハ、載セテ約章ニ在リ、」と言つて、官民に對して外國人に條約上布教權のあることを指摘し、又山東省當局に對しては、極めて強い語氣を用いて、その「事前ノ防範ニ疎ナリシコト」の責任を追求している。⁽¹¹⁾清廷のこの讓歩的態度は、やはりこの事件が大きな衝擊だつたことにもより、又これを境にして、外國人側の態度が、急に強硬に、且つ積極的になつたことに基づくのである。從來多數の民教紛争事件はあつても、外國人が殺害せられたことは、光緒二十三年十月七日（一八九七年十一月一日）の曹州事件におけるドイツ人宣教師、ニース及びホイル（Franz Nies u. Richard Heule）のそれ以來はじめてである。そして曹州事件に藉口しての、膠州、旅大、

威海衛その他の被占領と喪失との記憶は、まだ清廷に取り新らしい。コンガアがこの事件を本國に報告して、「この事件は遂に北京當局を醒覺して、事態の極度の重大性を、感知せしめたるもの如く、かくてこの度の叛亂も、今や鎮壓せらるべしと信ぜられ⁽¹²⁾」⁽¹²⁾と言ひ通り、たしかに清廷の上諭の調子は、一時的には外國人側の主張に接近し、それがコンガアやマクドナルドにさえ、多少樂觀的な見解をもたせた。しかしそれは單に一時的な變化に過ぎず、事態はたちまち逆轉して、いよいよ緊迫を強めるのである。

所でこの事件に最も關係の深いイギリス全權公使マクドナルドの態度は、少くとも當初、アメリカ公使コンガアのそれよりもむしろ溫和であつた。マクドナルドは光緒二十五年十二月十三日（一九〇〇年一月十三日）、肥城事件の加害者が、三人逮捕され自白したことを知ると、上海の副領事キャムベル（Campbell）に、濟南における彼等の裁判に臨席することを命じただけで、少くとも從來の他國の例のように、山東巡撫たる袁世凱の罷免を要求したりはしなかつた⁽¹³⁾。マクドナルドはむしろ袁世凱の手腕に信頼して、事態の好轉を期待したものの如くである⁽¹⁴⁾。彼が清廷に對し著しく強硬な態度を示しはじめるのは、後述の通り光緒二十六年二月（一九〇〇年三月）に入つてからであつて、その場合でも彼の態度はなほ、コンガアやケテルルや、フランスのそれに比べてさえ、慎重であり、實際的であつた、と言つてよいのである。

これに對してアメリカ公使コンガアは、當初から極めて強硬であつた。彼は先ず光緒二十五年十二月十一日（一九〇〇年一月十一日）、つまり肥城事件の直後に出た、現存の「徳宗實錄」には見えていない上諭⁽¹⁵⁾が、義和拳に對して寛大であり容認的なことを指摘して、はげしく問題にする。この上諭は、重要だから少し長く引用すると、「近來各省、盜風

日ニ熾ニシテ、教案迭出ス。言者多クハ會匪ト爲シ、嚴拿懲辦ヲ請ウ。因リテ念ウニ會ニモ亦別アリ。彼の不逞ノ徒ノ結黨聯盟シ、衆ヲ恃ンデ事ヲ滋クスルガ如キハ、因ヨリ法ノ宥シ難キニ屬ス。分ニ安ズルノ良民が、或ハ技藝ヲ習イ、以テ身家ヲ自衛シ、或ハ村衆ヲ聯ネ、以テ閭里ヲ互保スルガゴトキハ、是レ守望相助ノ義ナリ。シカルニ地方官ニシテ案ニ遇イ、分別ヲ加エズ、誤ツテ謠言ニ聽キ、概目スルニ會匪ヲ以テシ、株連濫殺シ、以テ良莠齊シカラズ、民心惶惑スルヲ致スモノ有リ。是レ眞ニ薪ヲ添エテ（水ノ）沸ルヲ止メントシ、瀾ヲ爲リテ魚ヲ噉ントスルモノ、民氣ノ靜カナラザルニ非ズシテ、實ニ辦理ノ善カラザルナリ。……各省ノ督撫ニオイテ、慎ンデ賢吏ヲ擇ビ、地方ヲ整飭シ、民ニ休息ヲ與エ、詞訟アルニ遇イテ、持平辦理シ、稍モ徧重セザレバ、平日ハ以テ民望ヲ孚ナウニ足り、事ニ遇ウモ自カラ以テ衆心ヲ服シ、大ヲ化シテ小ト爲シ、小ヲ化シテ無ト爲ス（ヲ得）ベシ。固ヨリ根本ハ此ニ在リ。邦交ヲ聯ルモ亦此ニ在リ。各省ノ督撫、……必ラズヨク朝廷ノ子惠元々、一視同仁ノ至意ヲ體仰セヨ。地方官ニ嚴飭シ、此等ノ案件ヲ辦理スルニハ、祇ダ其ノ匪ヲ爲スト否ト峠ヲ驛ルト否トヲノミ問イテ、其ノ會ト不會ト、教ト不教トヲ論ズルコトナカレ。吾ガ民モ當ニ桑梓身家ヲ保護スルヲ念トナシ、煽惑ニ聽キテ、禍ヲ構エ械ニ峠スルコト勿レ。威勢ヲ挾サンデ、以テ郷里ヲ侮ルコト勿レ。閭閻ノ安謐ヲ庶イ、藉ツテ宵旰憂勤ノ至意ヲ釋ケ。」云々と言うものである。

それは前節でやゝくわしくふれたような、清廷の基本的態度を、くり返して表明しただけのものに過ぎず、舊中國的王朝統治の傳統的基調からすれば、決して意外とするには足りない。しかし「會ト不會ト」を問わず、「匪ト不匪ト」のみを論ずると言う、會國藩以來の現實的會黨處理方式は、肥城事件によつて「覺醒」した清廷が、一舉に外國の主張に追隨することを期待していたコンガアに取つて、意外でもあり、極度に不満でもあつたことは、察するに難

くない。彼は十二月十五日（一月十五日）、この上諭の翻譯を同封して、ヘイに一書簡を發し、それが「一部（特に下
イツ公使フオン・ケテレル）の信ずる所」によれば、肥城事件の發表に對して出された、十二月四日（一月四日）の上
諭の義和拳に對する強硬さを、著しく後退せしめたものであり、又拳民その他の祕密結社員は、この上諭の「行間の
眞意をくみ取」つて、その運動を官廷が是認獎勵したものだ、と感ずるであらうから、彼等の動きはいよいよ猛烈を
極めるにちがいない、と述べてゐる。⁽¹⁶⁾

又十二月二十九日（一月二十九日）には、二度ヘイに報告書を裁して、

一 上記十二月十一日（一月十一日）の上諭以來、北部山東及び南部直隸の拳民の數はたしかに日々増大しつゝあるこ
と。

二 十二月十六日（一月十六日）の漢字新聞によつて、毓賢が閱見の際、光緒帝から「福」字の書と與えられたことを
知り、之に對して總理衙門に嚴重な抗議を行つたこと。

三 山東、直隸の動搖について、さらに詳報を得たので、イギリス、ドイツ、フランスの公使と會議を開き、その結
果情勢は、「黙視し難い」ものになりつゝあり、二つの會黨（大刀會と義和拳）を斷乎として絶滅する以外、事態を
改善する手段はないのに、中國政府はこれを十分重視していないと言ふ點につき意見が一致したこと。

四 同じ會議の席上清國政府に有效な處置を取らしめるような、同文のノートを各國から發することに決定し、又こ
のノートが十二月二十七日（一月二十七日）總理衙門に送達せられたこと。

等を述べる。同時に列強の「要求を強調し、中國人を屈從にまで驚嚇する（to emphasize our demands and frighten

the Chinese into a compliance) 爲には、イギリス、ドイツ、フランスと共に、アメリカの軍艦を、中國の海岸に沿つて北上させることが、時機に適し、advisable になるだろうと言ひ、その爲マニラからの軍艦派遣に關する海軍部との交渉をも要請したのである。⁽¹⁷⁾

このように強硬な處置を主張するほど、コンガアを激せしめたものは何か。コンガア自身によれば、十二月十一日(一月十一日)の上諭の文面とともに、「キリスト教徒と、その財産とを保護し得なかつた爲に、我等(コンガア達)の要求に基づいて、北京に召還せられた」毓賢が、處罰せられ降等せられる代りに、「福字」を賜つて榮譽を與えられた、と言ふことであつたらしい。彼はこのことを傳聞すると共に、先づ通譯官チェンシャイア(Chen-ai)に口頭で抗議せしめ、つゞいて十二月十八日(一月十八日)には、さらに文書で不滿を述べただけでなく、遡つて前年の沂水教案における、未逮捕者の即時捕縛と、釋放者の再逮捕をも、きびしく要求した。コンガアはそれ等一連の事件を通じて見られる、清國官僚の「怠慢」(official neglect)と、あたかもこれを容認するが如き、「曖昧な」清廷の態度とに對して、十二月十一日(一月十一日)の上諭の文言や、毓賢への「福」字下賜を例證として、抗議し、干渉しようとしたのである。⁽¹⁸⁾ 清廷はこれに對して、極めて冷靜に、一般に、「不逞」なる犯罪者の逮捕に關しては、十二月十一日、すでに山東巡撫に諭令ずみなること、山東省から報告があつた場合には、その内容を通報すべきこと、毓賢に天子から「福」字を賜つたことについては、十六日に許景澄から、通譯官チェンシャイアに充分説明した通りであること、等を述べた、簡單な返書を送つたのみであつた。⁽²⁰⁾ 十二月十一日の上諭と言ふのは、恐らくその文言が會黨特に義和拳を、是認擁護する傾きがあるとして、コンガアが強硬に抗議した當の上諭であり、元より特に沂水事件の加害者の逮捕を命じたも

のであるはずはない。清廷はイギリスの肥城事件に對して、アメリカ人が被害者の一部だつた沂水事件を、いわば蒸し返そうとするコンガアの意圖を、婉曲に、しかしはつきりと斥けたものと見られる。一體來京陞見する大官に天子が壽字又は福字を賜與することは、たしかに清廷通常の慣例だつたようであるから、コンガアの抗議は、純賢に對する憎惡の餘りとは言え、誤解と行きすぎの所爲だと言つてよい。しかも尙衙門の返言が、すでに許景澄が、口頭で説明した通り、と言うだけで、何等の釋明をもふくまないのは、少くともあまりフラットで素氣ない書き方だ、と言わなくてはならない。肥城事件は先づコンガアやケテルを通じて、外國人側の態度を硬化させただけではない。ほとんども打つて返す如く、清廷自身の外國人に對する態度をも、硬ばつたものにしたのである。

英・佛・獨・米四國の協議による、十二月二十七日（一月二十七日）の共同ノートは、かくして發送せられた。この一月二十七日のノートは、*Foreigners*にも藍皮書にも収録せられている。それは先ず山東省の北部、直隸省の南部及び中部における、義和拳・大刀會による動搖の擴大と激化を指摘して、それが地方官の無關心、默認、及び時には獎勵にさえよるものであることを主張し、特に彼等の掲揚する旗面に、「滅洋」(exterminate the foreigners)の文字があることに注意を喚起する。又陽曆一月十一日の前掲の上諭が、「會 (societies)」に善惡の差別を立てた爲に、その文面は一般に、義和拳や大刀會を、清廷が是認したものであるかの如き印象を與え、又事實これ等會黨の成員達は、公然とこのことを揚言して、中國人キリスト教徒を迫害しつゝある、と指摘する。そしてこれ等の諸動搖は、今直ちに強力な處置が取られなければ、間も無く「國際關係に容易ならぬ危機を招來」するような、一層重大な犯罪に發展するであらう、とて、取り敢えず、しかし必ず (as a preliminary measure, and one to which I attach the greatest importance)。

義和拳會及び大刀會の會名を指摘して、その活動と存在とを、完全に彈壓禁止し、又特にこれ等の集團の何れかへの参加や、或はその成員の隱匿は、清律に照して處罰せらるべきことを明記した、一上諭を發せられたい、と要請する⁽²¹⁾のである。

このノートに對する清報の反應は決して速かなものでなかつた。偶々陰曆の正月に際會した所爲もあり、コンガアがしきりに焦慮し、又督促した⁽²²⁾にかゝらず、ほとんど一月の後、光緒二十六年一月廿日（一九〇〇年二月十九日）になつてはじめて、總理各國事務衙門の、「飭シテ拳會ヲ嚴禁センコトヲ請フ」一摺に對して上諭が軍機大臣に下された。それは總理衙門がその譯文をコンガアに送達した際の書面によつても、明らかに十二月二十七日（一月二十七日）の四國の共同申入れに、答えようとするものであつたが、その文面は隱微で、且つ必らずしもコンガア等の、要求した項目を具備したものでなかつた。⁽²⁴⁾そこでコンガアと英公使マクドナルドとは、ドイツ公使フォン・ケテルル（Baron von Ketteler）、フランス臨時代理公使ダントウアール（Baron d'Aunouard）に、新たにイタリアの公使サルヴァゴ（Marquis Salvago）を加えて、五國公使會議を開き、慶親王をふくめた總理衙門側に會見を申入れ、その席上手交すべき第二の共同ノートを準備した。そしてこのノートに、従前の條項をくり返した他、特にこの要求によつて發せらるべき上諭は、かつて十二月十一日（一月十一日）の問題の上諭も又それに掲載せられた、「京報」（Peking Gazette）に登載せられなくてはならぬ、とする一項を添増し、且つもし清國政府が、これに従わず、動搖が繼續するならば、その結果は必らずや中國政府に取り、非常に重大（extremely serious）なものにならうと、武力干渉の用意のあることを、ほのめかす文言をつけ加えたのである。⁽²⁵⁾

この同文ノートを手交すべき會見は二月二日(三月二日)に豫定せられた。清廷はその前日、二月一日(三月一日)の夜に到つて、直隸總督裕祿をして一諭を發せしめた。そして「游手好閒、本業ニ務メザルノ流、自ラ教師ト號シ、拳棒ヲ演弄シ、人ニ教エ、及ビ師ニ授ジテ學習シ、並ニ父ヲ輪シ棍ヲ舞ワシ、街市ニ偏游シ、射利惑民スル者」は嚴行禁止シ、違わざる者は拏獲して、本犯は杖一百徒三年(限滿遞籍、嚴に管束を加フ)、坊店寺院がこれを「容留シテ報ゼズ」、地保人等が「查拏ヲ行ナ」わざる者は、「不應重律」の罪に照し、杖八十に處することを明らかに指示した。元よりこの諭令の文面も、基調としては民・教兩つながら一視同仁に扱おうとするものであつて、決して單純に外國人の要求に従がい、外國人側の主張を全面的に容れたものではないが、語調はきびしく、禁止的で、且つコンガア等の要求する要項は、大部分充されたものと言つてよい。⁽²⁶⁾

總理衙門側の意圖は恐らくこの諭令の發行によつて、翌二月二日(三月二日)の會見を回避し、或は少くともその際の列國の銳鋒を、和げようとしたものであろう。しかも尙例えばコンガアはそこに大刀會についての記載がなく、又京報に登載もせられなかつた、と言ふことに不滿をもち、⁽²⁷⁾二月二日(三月二日)には五公使がそれぞれ隨員を従がえて衙門を訪れた。當日の様子はイギリス側で作つたくわしいメモランダムが残つていて、かなり明細に知ることが出来る。⁽²⁸⁾

先ず英公使マクドナルドが從來の經過を述べて、一月二十六日(二月二十五日)の衙門からの回答は、列國のノートを misquote し、會名を擧げず、何ものを彈壓するのかを明かにせず、彈壓を命ずる上諭を出した、と言ふのみで、全く不満足 (absolutely unsatisfactory) なものであるから、新たに義和拳と大刀會とを指名して、これへの参加及

びその成員の藏匿は、違律犯禁なることを述べた上諭を、京報に掲載せよ、と要求した。これに對し衙門側の諸大臣は、明らかに外國側には何等か誤解があるらしいこと、第一回の同文ノートは、舊曆新年の休暇の直前に到着し、休暇が終ると共に衙門は嚴禁拳會の一摺を上つて、これに應ずる上諭を賜つたこと、又昨二月一日(三月一日)の諭令に見るが如く、義和拳は指名禁止せられてゐること、清廷はこの問題を、非常に重視すればこそ、その上諭は京報に登載するよりも、はるかにより速く、より効果的な方法(五千里)で、直・東二省の督撫に送致されたものであること、清朝は嘉慶(一七九六—一八二一年)以來、義和拳を嚴禁して居り、その方針は今も尙變らないこと等を挙げ、釋明した。マクドナルドは昨夜のような上諭が、もつと速かに發せられたならば、本日の會見は不要だつたらうけれども、それが昨夜になつて發せられたのであるからとて、前の要求をくり返し、京報への上諭掲載を固執した。衙門側は慶親王以下、反復して中國政府の誠意を保證し、又重要機密なる上諭は軍機大臣を経て各省の督撫に送達されるのが通例で、京報への登載は日常普通の、しかし施行ずみの上諭を、記録するものに過ぎぬ、と言ひ、又問題の上諭が特に會名を擧げないのは、清廷が一般に、全國に亙つて會黨を禁止してゐるからであつて、その諭令の意の存する所はこの二會黨にある、と言つて、列國の非難の當らないことを述べた。マクドナルドはフォン・ケテルルやコンガアと共に、交々十二月十一日(一月十一日)の上諭が拳民を大膽ならしめたことの弊害を指摘し、又上諭中大刀會を指名しないのは、毓賢が大刀會の「頭目」だからであらうと言ひ、その毓賢が處罰せられることなく、陞見して「福」字の御書を賜つたことの不適當を攻撃した。これに對し衙門側は義和拳と大刀會は一體化して區別し難いことを述べたが、同時に外國人側が毓賢を攻撃したのに對しては、むしろ愉快の表情を以てこれをきき、慶親王は毓賢が山東で拳

民・刀會の彈壓を怠つたことを、遺憾とする旨の發言をしたと記録せられている。

マクドナルドは清廷が、列國の要求を完全に容れる以外、極度に重大な結果の發生を妨ぐことは出来ないとの、一月二十八日(二月二十七日)附申入れの抜き書きを音讀して手交し、又別に準備して來た第二回目の列強からの同文申入書を、各公使から衙門側に手交した。衙門側はくりかえし、十二月十一日(一月十一日)の上諭を發した、清廷の善意について釋明したが、マクドナルドはこの上諭を問題にすることを拒否し、列國の見解は、衙門の殿下茲に諸卿の前に、明瞭に提示せられたのであるから、これ以上の論議は不必要である、と言ひ、又五國の公使は現にいづれも、それぞれ本國政府の訓令に基づいて、行動しつゝあるものであることに深甚の注意を拂われない、と要請し、急速な回答を期待する旨を述べて會見を打切つた、のである。

その後はどうなつたか。總理衙門は光緒二十六年二月七日(一九〇〇年三月七日)附で、會見當日口頭で述べた所を文書にして回答しただけである。一月二十八日(二月二十七日)の諛旨が軍機大臣を経て、直隸の督撫に直送せられたのは、むしろ中國政府が事態を重視した所以であること、同一の事件につき二度新なる上諭を奏請することは、慣例に反し不可解であること、京報は地方諸省においては、官吏以外には閲讀せられず、従つて京報に登載することは、決して諛旨を民間に知悉せしむる、效果的な方法でないこと、等々⁽²⁹⁾。これに對してマクドナルドは、衙門宛の文書に露骨な不滿を直載に表明するが、衙門はこれに答えない⁽³⁰⁾。コンガアは二月六日(三月六日)附衙門あての文書で、更めて毓賢の責任を追求し、アメリカ人宣教師とその從信者との生命財産の安全保障のために、將來永久に、その管下に於て宣教活動の行われる一切の地方へ、毓賢を地方官として任命することに對し、「公式にして最も強調的」なる抗議

を提出する⁽³¹⁾と書き送つた。もしこれに清廷が従つたならば、毓賢はほとんどの省の地方官にも、就任し得なかつたであろう。しかしその數日後、二月十四日(三月十四日)には、袁世凱が正式に山東巡撫に任ぜられると共に、毓賢は山西巡撫に調せられた。コンガアがこの事をヘイに報告する書翰の中で言う通り、それは決してアメリカに對し「餘り素直でも友好的でもない」(not very respectful and friendly)態度と言ふべきであつた⁽³²⁾。列國軍艦の中國派遣が、この状態の歸結であつた。

五國公使がしきりに固執した上諭の京報登載の件は、光緒二十六年三月二十日(一九〇〇年四月十五日)になつて、英艦二、佛艦一、米艦一が太沽バーに到着し、獨艦二も青島に待機する、という狀況の下で、前掲一月二十日(二月十九日)の上諭を受領した旨の、直隸總督からの上奏文を京報に掲げ、これに將來義和拳を隨時抑制すべき旨の批語を加えることによつて、形式的には實行せられた⁽³³⁾。しかしすぐその二日後には、別に直督裕祿・提督梅東益等に向つて、清廷は一上諭を下し、これに「民・教皆朝廷ノ赤子」なるにより、「是非ヲ論ズルニ民教ヲ分タズ、持平辦理ニ努」め、「民間ニ拳技ヲ學習シテ身家ヲ自衛スル者モ、タダ其ノ匪トヲ論ジテ、必ラズシモノソノ會ト不會トヲ問ワズ」、地方の官吏を嚴飭して、「因應得宜」せしめよと諭令するのである⁽³⁵⁾。それはコンガアやケテルがしきりに論難した、十二月十一日(一月十一日)の上諭と、全く同じ清廷の態度を示す。三ヶ月間に互る五國公使の清廷との交渉、海軍力の示威による壓力も、結局清廷の反感を醸成した以外、無効だつたと言わなくてはならない。そして慶親王以下の總理衙門の大臣達が、毓賢に必らずしも快くない表情を示したことから察せられるように、清廷の内部に次第に二つの勢力が分裂して、その一つは極端な、排外主義に流れて行くのである。

(1) 實錄、同日條。

(2) 同右。

(3) FRUS, 1900, p. 78, Incl. 3, "Mr. Conger to Tsung-ti Yamen,"

(4) Ibid. p. 79, Incl. 5, "Mr. Conger to Tsung-ti Yamen."

(5) Ibid. p. 84, Incl. 15, "Mr. Conger to Tsung-ti Yamen." 尙ホンガアは前述十一月五日(十二月四日)附書簡(FRUS, 一九〇〇、七七頁)では、毓賢を demand はしなすが suggest したと言つてゐる一方、十二月二十九日(一月二十九日)のハイン宛書簡では、毓賢を指して This man, who because of his failure to protect the Christians and their property, had, upon our demands, been called to Peking と云つてゐる。

(6) 總理衙門は十月九日(十一月十一日)以來、五道のスタイアズ及びコンガアの書信を得て、十月二十八日(十一月三十日)によくやくアメリカ側へ返書を與える。しかもその内容は、衙門が毓賢に電命(スタイアズの最初のノオトで要求せられた、そして多分實錄の十月二十六日(十一月二十八日)に見える上諭——前掲——に相當する電命)を、送つたと言ふことを述べたに過ぎない。そしてその後にも袁世凱に對しては、上述の如く武力の行使をむしろきびしく禁じているのである。

(7) 田保橋叢「義和拳匪亂と日露」(史學會「東西交涉史論」下、一〇六二—六三頁。)田保橋氏は毓賢を山東巡撫に起用した北京宮廷も、毓賢自身も、義和拳の禁壓に熱意がなかつたわけではなく、平原事件以後の動亂の擴大は、むしろ蔣楷や袁世凱の過失によるものである、とし、従つてこの後特に毓賢が著しく排外的になつたのも、専らこの時外國人側特にアメリカが、内政に干渉し、その結果として毓賢に「政治的な生命を失」わせたことに基づく、とせられる。しかも前節に述べた如く、宮廷及び毓賢に、義和拳を禁壓する意志があつたかどうかは疑わしい。又毓賢は本節で述べらる如く、たちまち山西の巡撫に任せられるので、決して永久にパーチせられたわけではない。

(8) Blue Book, China No. 3 (1900). Correspondence respecting to the insurrectionary movement in China, presented to both houses, July 1900, p. 2, No. 9. Sir C. MacDonald to the Marquess Salisbury (Peking, Jan. 5, 1900, received Feb. 19). 尙國の書翰は "The danger to which, in both provinces, foreign Missionary establishment have been thus exposed, has been the subject of repeated representation to the Chinese Government by others of the foreign representatives — especially the German and United States Ministers — and myself." と言ひつゝ、"ナンタムキマテレルと共に、'インデナホルムも' 誠實の罷免に與ひかつ力がきつたのかも知れなす。

(9) B. B. China No. 3 (1900) p. 1. No. 3. Sir Lofénh to the Marquess of Salisbury (Jan. 10), No. 9. Sir C. MacDonald to the M. of Salisbury (Jan. 5, Peking) etc. 尙の事件に於て、FRUS 1900, p. 83, No. 307. Mr. Conger to Mr. Hay を參照。

(10) B. B. China No. 3 (1900), p. 4, No. 9, with incl. 1, 2. 「單獨に、一輪車に乗つて、亂民に滿ちた鄉村を旅行中」だつたブルツクスを襲つたのは「紅色の turban をつけた拳民 (Boxers)」であつて、「全員刀劍等で武装」してゐた。ブルツクス英撃の報道を得た袁世凱は、之を購贖 (ransom) によつて救出しようとしたが、その間もなく肥城縣からブルツクスが騎馬の拳民達によつて毛家鋪に拉置せられ、殺害せられた、との報道を得たので、三日を限つて犯人の逮捕を發命した。

(11) 實錄、光緒二十五年二月四日 (一九〇〇年一月四日) 條。「諭内閣、袁世凱電奏、山東平陰、肥城兩縣匪徒、聚衆滋擾、事將、教士、架至、毛家鋪地方、該署撫多方設法購贖、並派、馬隊、兜擊、卒以、防護不及、教士被、匪徒殺害、等語。各國傳教、載在、約章。愚經、諭令、各該督撫、督飭、地方官、隨時隨地、認真保護、奚三令五申。乃山東地方、竟有、教士被、害之事。該地方文武官員、事前疎、於防範、已屬、咎無、可辭。若不、即將、兇犯、邊緊緝獲、尙復成、何事體。著、袁世凱、迅將、疎、防之該督各官、先行、參處、一面、勒、限嚴、緝兇犯、以靖、地方、而敦、隣好。」(義和團、IV、一〇頁)

(12) FRUS, 1900, p. 86, No. 307, Mr. Conger to Mr. Hay.

(13) B. B. China No. 3 (1900), p. 2, No. 4, Sir C. MacDonald to the M. of Salisbury. ナンベリンのキレンキレンの報告に基づいて、駐英清國公使は “I have heard with satisfaction of the prompt action taken by your Government in this matter, and I trust that Her Majesty's Government may shortly be informed that the perpetrators of the outrage have been brought to justice” と語つた。(Ibid. No. 5, The M. of Salisbury to Sir Chichele Lofeng-tuh.) 但し勿論犯人孟洗汝・吳方城の逮捕處刑、肥城縣知縣金猷大の革職と共に、イギリスは十分な郵款と賠償を得た。恤款及教堂再建費九千兩、及び平陰縣における教堂用地五畝がそれである。勿論ブルックスは肥城で殺されたので平陰の教堂が破壊されたわけではないから、これは設備の擴大を意味する。又毛家鋪の郷長は銀五百兩を捐給して記念碑を立てさせられた。(佐原篤介・浙西譚隠「拳亂紀聞」(義和團第一冊、一〇七頁)。

(14) B. B. Ibid. No. 6, No. 7, No. 9, pp. 2—3.

(15) この場合だけではない、包子傑の「輯拳時上諭」等に載つていて、しかも實録に見當らない上諭は、決して少くない。この十二月十一日の上諭は「義和團」V、一二四頁に見える。それは「義和團」の編者が指摘する通り、實録編纂に際し外交上の顧慮から、銷毀せられたものであるかと思われる。(「義和團」第四冊、「書目解題」、五三七頁参照)。

(16) FRUS, 1900, p. 88, No. 312, Mr. Conger to Mr. Hay. 尙書の書簡である。モンガンより一層積極的不満を表明した者は、ドイツ公使ケテレルであつたように見える。しかし前述した如く Die diplomatischen Akten des auswärtigen Amtes, 1871—1914 の第十六冊には、一九〇〇年四月以前の文書を全く載せてゐない。

(17) FRUS, 1900, pp. 93—94, No. 316, Mr. Conger to Mr. Hay. この書簡の末尾には書く。“The Chinese Government really care little for anything but power, and an earnest exhibition of it always promptly moves them” と。この

コンガアに代表せられる當時一部外國使臣の中國理解の程度を察すべきであらう。

(81) FRUS, 1900, pp. 93—94, No. 316, Incl. I, Mr. Conger to Tsung-tsi Yamen. この書簡は當時のコンガアの態度と、彼の事態緊迫への關係を實にはつきりと示すものとして注意に値する。すなわちイギリス人に關する肥城事件の發生を機として、コンガアはアメリカ人が被害者の一部であつた、前年の沂水教案をいわばむし返すのである。“So far as this legation is concerned, the cases are not closed and will not be closed until the ringleaders mentioned are severely and adequately punished as agreed upon. I must, therefore, demand that Ho Wenchi and Ho Tingmin be immediately arrested, and that Chenhui and Ho Laimin be rearrested and all be forthwith rigorously and adequately punished.”沂水事件の處理さえ怠つてゐるような“official neglect”こそは、山東現在の收拾すべからざる動搖と混亂の原因であり、ブルックス殺害事件も又これに因つて起つたのである。自分(コンガア)がくり返しくり返し文書でも口頭でも、清廷は毓賢に嚴命して、即時有效な處置を取らせるのでなければ、恐るべき事件の發生は確實だと警告したのに、衙門は常にすでに毓賢に電命したと言ひ、毓賢は山東の局面は平靜であつて、教士や教民は、無實の謠言に脅えてゐるにすぎないと辯解し、遂にこの度の肥城事件の發生に到つたではないか。しかも“For this conduct the Governor richly deserved the severest punishment and degradation. But, greatly to the surprise and disappointment of all foreigners, he has received instead fraternal and complimentary reward from the Imperial Throne. Surely rioting can not be suppressed and persecution stopped in this way.”又山東で拳民その他の非法團體が、「公然と、旗をかかげて」、外國人の驅逐を決意してゐるのに對して、このような清廷の處置は獎勵以外の効果をもつはずはないではないか、云々と言うのである。肥城事件は必らずしも直ちには、イギリスの態度を硬化させなかつた。それは先づコンガア(とそして恐らくケテル)を通じて、清廷に極度の壓迫を加へしめたのである。

(19) 勿論陰曆光緒廿五年十一月十一日の、後に徳宗實録から省かれた上諭(本小稿二九頁)であろう。とすれば、それは前掲のコンガがそれに抗議しようとした當の上諭を指すことになる。陽曆一八九九年十二月十一日(光緒廿五年十一月九日)發の上諭は、實録にも前掲の包子傑「拳時上諭」にも、見當らな。

(20) FRUS, 1900, pp. 95—96, The Tsungli-Yamen to Mr. Conger.

(21) Ibid. pp. 96. Mr. Conger to the Tsungli-Yamen. じれと同文のノートは、B. B. China No. 3 (1900) p. 13, Incl. in No. 27, Sir MacDonald to the TY. じれ見せよの尙 B. B. Ibid. p. 6, Sir C. MacDonald to the M. of Salisbury (Mar. 10) 及び同一三頁、右記文書第二七を参照。イタリヤも公使會議には招請せられなかつたけれど、同時に單獨で同文のノートを發した。

(22) FRUS, 1900, pp. 104—105, No. 388, Incl. 1, 12. Mr. Conger to TY. (Feb. 2, Feb. 21, 1900)

(23) 同右、同封文書第三、「總理衙門よりコンガ宛」。(一九〇〇年二月二十五日—光緒二十六年一月二十六日)。

(24) 實録光緒二十六年一月二〇日條、「義和團」第四冊、一一頁。文面が係争の中心になつたのであるから全文を引いて置く。「諭軍機大臣等、總理各國事務衙門奏請飭嚴禁拳會一摺、上年據山東巡撫電稱、各屬義和拳會、以仇教爲名、所處滋擾、並及直隸南境一帶、疊經諭令直隸山東督撫、派兵彈壓。此種私立會名、聚衆生事、若不嚴行禁止、恐愚民被其煽惑、蔓延日廣、迨釀成巨案、不特不利用兵剿辦、所傷實多、朝廷不忍不教而誅。着直隸山東各督撫、剴切出示曉諭、嚴行禁止。俾百姓咸知私立會名、聚衆滋事、皆屬違禁犯法、務宜革除惡習、勉爲良民。倘仍有執迷不悟、復蹈故轍、卽行從嚴懲辦、勿稍寬縱。至民教同屬編氓、凡遇此等詞訟案件、該地方官務當秉公審斷、但分曲直、不論民教、不得稍有偏倚、用副朝廷一視同仁之至意、將此諭令知之。」文面がはなはだしく婉曲なばかりでなく、基調は依然として一視同仁論である。それは大刀會にふれず、會衆藏匿の罪にふれないから、四國の「要求に従わないもの」だ、と言ふ

のが、ロンガマの見解であつた。(後註二五のハイ宛書簡を見よ。)又これを以て四國の共同申入れに答えたものだ、とする。二月二十五日(一月二十六日)の衙門の書信(前註二三)は、共同ノートを misquote し、會名を擧げず、この上諭の發表を以て事を終らう、とするものだから、列國に取つて不満足だ、と言ふのが、マクドナルドが本國へ言い送つた趣旨であつた。

(B. B. China, No. 3, 1900, p. 17, No. 32, Sir C. MacDonald to the M. of Salisbury, Peking, Mar. 5, 1900)

(25) FRUS. 1900, pp. 102—107, No. 338, Mr. Conger to Mr. Hay, Mar. 10, 1900, Incl. 1, 2, 3, 6 及び前註のマクドナルドのノンヌスリ宛書簡を見よ。ロンガマのハイ宛書簡同封文書第六、及マクドナルドのノンヌスリ宛書簡への同封文書第三十二は、三月二日の會見の際手交せらるべき同文ノートである。これ又重要であるからイギリスの分を援引して置く。M. M. les Ministres, I have the honour to acknowledge receipt of your Highness' and your Excellencies' note of the 25th inst. in answer to my notes of the 27th January and the 21st February on the subject of the anti-Christian disturbances in Shantung and Chihli. As the Yamen have not acceded to my request to obtain the issue of an Imperial Decree in the terms specified in my note of the 27th January, I beg to repeat a portion of that dispatch with the addition of the words "in the Peking Gazette." I request that an Imperial Decree may be issued and published in the Peking Gazette ordering by name the complete suppression and abolition of the "Fist of Righteous Harmony" and "Big Swords Societies, and I request that it may be distinctly stated in the Decree that to belong to either of these societies or to harbour any of its members is a criminal offence against the law of China. Nothing less than this will, I am convinced, put an end to the outrages against Christians which have lately been so prevalent in Chihli and Shantung. Should the Chinese Government refuse this reasonable request I shall be compelled to report to my Government their failure to take what may be called only an

ordinary precaution against a most pernicious and anti-foreign organization. The consequence of further disorder in the district concerned cannot fail to be extremely serious to the Chinese Government." (BB. China No. 3, 1900 p. 21)

(26) 「光緒二十六年正月二十日奉上諭……欽差大臣北洋道商務直隸總督部堂裕爲到切曉諭嚴禁事」(勞乃宣輯「庚子拳禁發和拳彙錄」——「義和團」第四冊、四七七頁)。その英譯は前掲 FRUS. 1900 の一〇六頁、BB. China No. 3 (1900) の十九頁に見えてゐる。尤もFRUSを藍皮書の譯文は、二月一日(三月一日)附で送達せられ、勞乃宣の傳える諭令の方は、二月二日(三月二日)づけになつてゐる。列國の勢に迫られて、二月一日(三月一日)夜發布手紙の途中で、取り敢えず各國公使館に送致せられたものと想われる。

(27) FRUS. Ibid., pp. 102—103, Mr. Conger to Mr. Hay.

(28) B. B. Ibid., pp. 21—23, Incl. to No. 33, Memorandum of Interview between Sir C. Macdonald, with four other Foreign Representatives, and the Tsungli Yamen, on the subject of Boxer Disturbances in Shantung and Chihli.

(29) B. B. Ibid., p. 25, Incl. 1 to No. 36, FRUS.

(30) 前掲藍皮書「中國」第三、一七〇〇年〇二月五日の Incl. 2 in No. 36, Sir C. Macdonald to the Tsungli Yamén. Mar., 10, 1900.

(31) FRUS. Ibid., p. 109 Incl. 1, Mr. Conger to Tsungli Yamén.

(32) 實錄「同日條」(「義和團」第四冊、一二五頁) FRUS. Ibid., p. 112, No. 345, Mr. Conger to Mr. Hay.

(33) FRUS. 1900, p. 114, No. 356, Mr. Conger to Mr. Hay Apr. 12.

(43) FRUS, 1900, p. 117, No. 360, Mr. Conger to Mr. Hay, Apr. 16, BB, China No. 3 (1900); p. 23, No. 34, Sir C. MacDonald to the M. of Salisbury, Apr. 16, 1900.

(35) 實錄、光緒二十六年三月廿二日（一九〇〇年四月十七日）條。

五 動搖の擴大と「反官」的傾向の増大

却説そのような交渉が、北京で行なわれている間にも、拳民の數は日々に増え、拳壇が各地に設立され、動搖が直隸全省へ波及して行つた。光緒二十五年の十月二十九日（一八九九年十二月一日）附で、德州の附近に在住布教していたA・H・スミスが、北京のコンガアに送つた求援電報によれば、拳民活動は當時山東北部・直隸南部の二十州縣に互つていた。⁽¹⁾十一月十四日（十二月十六日）附で同じA・H・スミスが、ボストンのアメリカ外國傳導本部のデャドスン・スミスに宛てた報告には、高唐・德州・深州・冀州・恩縣・平陰縣等の地名が散見する。⁽²⁾拳民はこれ等の地帯で、教民や教士から、もちはこび得るほどの財物を略奪し、移動し得ざる家屋を焼き、教民の子弟を拉置して身代金を要求し、又屢々男女老幼を毆傷殺害した。同時に教民側も、或は部落を單位とし、或は教堂を據點として武装し、⁽³⁾拳民を虜掠し、或はこれとほげしい戦闘をも交えたのであつて、決して單純に defensiveであつたわけではなかつた。しかし肥城事件前後においては、動搖はなほ北山東南直隸に止まつて、局地的でもあり、又その規模も小さかつたようである。

むしろ事態が地的にも規模的にも、急速に進展したのは、光緒二十五年の十二月（一九〇〇年一月）から四月（五

月)にかけて、北京で四國、次いで五國の公使團と、總理衙門との間に、空しく交渉が繰り返されている間に、であつた。前稿でも述べた如く、光緒二十五年・二十六年にかけて、華北特に直隸は、未層有の乾魃に際會する。光緒二十五年(一八九九年)の三・四月から十一月まで、北京の空からは一滴も雨がふらなかつたが、それが光緒二十六年(一九〇〇年)になつても、一月(二月)から五月(六月)の初まで、ほとんど雨が無いのである。⁽⁴⁾ 乾魃で麥の發芽の悪い年の、舊正月前後には治安動搖が起り易い。これに加えてそのような動搖擴大の報導が、マクドナルドやコンガーやフォン・ケテルを焦慮させ、外國人側の態度をいよいよ干渉的・高壓的にならせると、それが逆に又外國人に對する中國官民の反感を刺激して、動搖の擴大を助けたのである。

動亂は一方では臨清・高唐・恩縣等の山東北西部地方から北方に擴大して、河間や保定や新城に波及する。他方德州附近から大運河沿いに北東に擴がつて、光緒二十六年(一九〇〇年)の初頭には、天津の附近に到るのである。⁽⁵⁾ 二月の下旬(三月下旬)には、天津城内外、到る所に三月一日を期して、外國租界を攻打する旨の掲帖がはられた。同じ頃北京の内外にも、教堂を燒毀するための招貼(拳民の召集を令する掲示)がはり出され、流言が飛び、義和拳法を習う者が増えた。⁽⁶⁾ 他方では特に保定を中心として、萬余の拳民が聚集し、三月二十日を期して事を起すとの風説がしきりであつた。それだけではない。この頃になると、一方では保定から、文安・霸州・固安・雄縣一帯へ、滹沱河に沿つて東北に動搖が擴大し、大運河に沿つて北東上した波浪と合して、天津附近に到り、首都周邊の拳民の動きは、いよいよ活潑に、露骨になる。同時に天津以北の諸縣や、熱河、錦州、牛莊その他の西部滿洲地方にも、義和拳を稱し、拳民を「募集」する者が相次いで現れる。⁽⁷⁾ そしてやがて濁流鎮をはじめとして、京津の各地に「拳壇」が設けられる

と、これを中心に拳民の勢力が、多少とも定着化し、領域化して行くのである。

そのような動亂の擴大に關して、先づ指摘しなくてはならぬことは、少くとも當時の義和拳は、なほ統一的な、組織あり體統ある團體を形成して、一、成員或は支配領域につき、山東から直隸・熱河を覆うものに、生長擴大して行つたのではなく、又二、それが山東北部から京・津地區へ向つて、移動したのではない、と言ふことであろう。勿論後に觸れる涑水事件にその顯著な一例が見られるように、民・教紛争事件に際して、教民に欺壓せられた郷紳や農民が、他地方から義和拳の「師兄」を招いて、これを中心に集つて拳法を練り、報復を企圖すると言ふ形で、義和拳が地域的に傳播したことは多かつたであろう。又義和拳の「師兄」達の側から、積極的に他地方へ出かけて、種々の靈顯や利益を掲げ、或は何等かの教義を宣傳しながら、拳門に入る者を招いた例も、無數にあつたであろう。後述するように師兄達が「拳壇」を開設し、「招帖」を掲げ、屢々一種の通行税や住民税的な賦課金を徴收し、官吏を陵ぐほどの勢力を誇示するに到れば、土地をもたぬ雇農や貧農や、都市の無産者がこれに參集して、急速に成員數が増えたことも、一向に不思議ではない。しかしそのような傳播關係の中心になる、義和拳の「師兄」達、「教師」と稱する者の間には、少くとも當初は、殆んど脈絡がなかつたように見えるのである。

平原事件における朱紅燈・李文成は、山東で起つて山東で刑死した。しかし間も無く光緒二十五年の十一月十六日（一八九九年十二月十八日）には、平原の直ぐ北の直隸省景州に、「拳匪武修和尙等」が起つて、「衆ヲ聚ルコト千余人ノ多キニ到リ、旗幟ヲ張樹シ、槍砲ヲ拖拉シ、教堂ニ往攻シ」て、官兵の攔阻に逢うと、「隊ヲ整エテ捕ヲ拒ミ、勇丁ヲ槍傷」した。⁽⁸⁾武修以下八十名は捕えられて、景州で治罪され、各村の拳廠も解散せしめられたが、しかし間も無く

それと又別に吳橋には、李德海・鄭鳳亭・節小廷が立ち、河間には慶生劉蔭梧、附生魏書香、黃汝宣、白樹春、郭佩琴等が、「晝伏夜現」して聚衆演拳した。⁽¹⁰⁾ それと後述する涑水事件における閻洛福や、これに拳法を傳授したと言われる、定興の麻子險、新城の宋姓三、住所も名も不明の「穿草鞋的和尙」などを對比すれば、その行動や動機、政治、社會的基礎には、元より共通のものが多く存する、と思われる反面、決して何等かの全體的統屬又は結盟關係をもつて、事を起したものと見られず、又蜂起後も彼等の間に、個々の蜂起を一つの團體行動に整序するような、まとまりはなかつた、と思われるのである。

だから天津附近の「總匪首」だとせられた李來中や、「京城ノ匪首韓八」⁽¹¹⁾や、濁流鎮に「天下第一壇」を建て、
「萬國來朝」を誇號した張徳成や、これも天津に横行した曹福田が、從來かつて聞えることなく、突如として光緒廿六年（一九〇〇年）の春に到つて、當時の見聞録中に出現し、しかも動搖全體の主動者の地位を占めるように見えることも、いわば當然なのである。彼等は舊中國社會の、中層・下層の、様々な職業の一偶から飛び出して、今や華北を覆わんとする動亂に参加する。例えば韓八はかつて吏部の繼承つまり書記に充てられたことがあり、好んで演劇に登場し、「頑児票」と渾名せられた、胥吏の出身者であつた。⁽¹²⁾ 張徳成は白溝河に舖商の貨物を裝運していた船戸で、偶々濁流鎮に停泊し、この地方の拳衆に有力な頭目がないのに乗じて、土地の好事者と響應し、拳壇を建てて壇主となり、特に河道に關卡を設けて、通過する船舶に對し、「奸仇ヲ查」することを名として「訛案却掠」を加え、恐らくその收入によつて、急速に富強をなした者である。⁽¹⁴⁾ 曹福田は天津靜海縣出身の游勇で、生業なく鴉片を嗜む「無頼」であつた。洋人と洋教とを仇敵視するだけでなく、舶來品や西洋的技術の産物や、洋書を読む學生や、はなはだしきに到つ

ては「洋」字をもつて呼ばるゝ一切のもの（例えば人力車―東洋車など）をも、異端視し一掃しようとした拳民の間にあつて、彼ひとり「洋貨中國ニ入ルコト久シ、商民ニ何ノ罪カアラン」と言つて、中國人の洋物商人を疵護したことが、輸出入商の多い天津住民の信奉を集めた所以だ、と傳えられる。⁽¹⁵⁾初期の平原事件には本明和尚が、景州では武修和尚が活躍したように、天津では素姓の明らかでない僧侶海乾が、道力によつて海を乾涸させて、列國の軍艦を擱挫せしめると信ぜられた、と言われる。⁽¹⁶⁾平原事件に朱紅燈と稱して活躍したのは、李文成⁽¹⁷⁾と言ふ男子であつたが、拳亂が濁流鎮・滄縣・天津に波及した頃から、それ等の地方には「紅燈罩」又は「紅燈罩」と言ふ女子の一群があつて、能く水を涉り、空中に騰昇して、洋樓に火を放つて燒くことが出来る⁽¹⁸⁾と誇號した。彼女等の首領は黃蓮聖母と呼ぶ、大運河地帯の「土娼」だつたと言われている。それ等の人達はいずれも、當時の動搖の擴大に乗じて、バラバラに（勿論佛・道教徒のキリスト教に對する反感や、遊勇の動亂待望のような、動機の共通性を否定する意味ではない）それぞれ運動を起す。そしてそれが全體としては、今や次第に華北三省を覆おうとする、義和拳亂の動搖を形づくるのである。

しかし元來はそのように脈絡の無い形で、事を起した首領達の間にも、時とともにゆるやかな、訂盟や歸屬の關係の生れる場合もある。特にいわゆる「拳壇」の設立によつて、一度流動化した拳民の動きが、次第に定着的になつて行くにつれて、その傾向が強められる。例えば張徳成が濁流鎮に拳壇を建て、「天下第一壇」と稱したのに譲つて、曹福田がその天津の居室の門傍に、「署理靜・津一帶義和神團」と署せしめた、⁽¹⁹⁾と言ふのはその一例である。又同じ天津の附近で、「津城ノ内外、壇ヲ設クルモノ數十處、三義廟ヲ推シテ首トナシ、號シテ總團ト曰ウ。凡ソ會議ニハ皆三義

廟ニ詣ル、」と言うものは、その別證である。然しその場合でも、それは個々の師兄や頭目の間に、個別的・人間的な義兄弟關係や盟好が出来るに止まり、そのような「師兄全體」、いわんや成員全體をふくめての體統の意識は、必らずしも十分明らかでなかつたであらう。そしてその頭目の間でさえ、天津の張徳成と曹福田に適例が見出されるように、時に反目と競争との起つた事例は枚擧に暇がない。つまり義和拳の動きは、無数の小動搖が、併列的に起る、と言う形で、平面的に擴大するのである。そしてそのような小蜂起が、どこでも似通つた形と、共通のスロオガンを掲げたのは、一方では舊中國の社會に、會黨や教門による暴動を、一般化させるような社會的條件が豫かじめ成熟して居り、他方では排外反教の意慾が、北部中國人全體の心に、廣く強く行きわたつていたからであらう。

所でそのような師兄達の下へ、「聚衆」せられる拳「衆」達は、どのような社會層から、どのようにして集まつて來るか。先づ群衆が呼び集められる方法にふれれば、「拳壇」と「掲(招)帖」とは、そのような群衆形成の二つの中心的手段であつたようである。拳壇とは何か。義和拳民の守護神である、道教的・俗信的な、神々を祭る祭壇であり、師兄の居處であり、拳民の據點であり、同時に拳法演練の場所でもあつた。當時の見聞録に散見する、「拳壇」の記述は、附註に援いて置く。⁽²¹⁾ 平原事件に際しても、平原知縣蔣階が人を遣つて義和拳の「拳廠」を視察せしめたと言う記事があり、又後にふれるべき涑水事件の前後にも、直隸の農村地帯に、拳民が「廠ヲ設ケテ人ヲ招」いたとか、「拳廠」で練拳した、と言ふ記事はかなり多く散見するが、この「拳廠」が恐らく後に天津地方で「拳壇」と言われるようになつたものの素朴な前身であると思われる。拳民が特に大きな寺廟や邸宅に占據し、旗を立て壇を築き、香を焚いて練拳呪拜する場所としての、「拳壇」を壯嚴しはじめるのは、光緒二十六年の五月(一九〇〇年四月)張徳成が濁流

鎮に天下第一壇を建ててからだ、とも言う。とすればそれは前述の如く、張徳成が運河沿いに地歩を占め、南北の舟運交通を管制して、そこから豊富な通行稅收入を得たことに基づく、と言えるかも知れない。張徳成や曹福田は拳壇に附近の「無知ノ愚民、」つまり農民や無産者を受け入れはじめた。各所の城鎮には、彼等の需要する刀刃を鍛える丁の聲が日夜つゞき、治鐵を業とする者が富を成した。⁽²⁴⁾ 拳壇では貧民等に、金錢や食物を施給したのではないかと思われる記載もある。⁽²⁵⁾ 五月中旬以後の天津では、各團(壇)が繩張りをもち、晝夜巡街して「教民ヲ誅スル」と共に、或は毎戸に麵餅を備えしめ、或は富戸に向つて銀・米を勒捐させた。⁽²⁶⁾ つまり素朴な形で、ではあるが、拳民の支配が定着化しはじめるのである。義和拳は前述の如く、平原事件直前においては、尙晝間農耕に従事した農民が、夜間集合して拳技を練り、教民や教士に對抗する、自衛的・定着的な形體を取つていた。やがて一方では、專業化した「師兄」達が増え、各地の民・教紛争に介入しつゝ、村から村へ、連鎖的に義和拳法の傳播と擴大をもたらすことになると、多少共流動的な動きを示した。そしてさらにそのような師兄達が、各地に拳廠を設立し、それが次第に都會化して拳壇になり、人口稠密な都會地や、交通の頻繁な運河地帯をなわばりとして確保するようになる、二度最初とはちがつた、動亂の擴大と言う觀點からすればより高次な、定着化の傾向を示しはじめなのだ、と考える。

しかし拳壇が京津地區に林立する以前に、拳衆を集めるのに一層役立つたのは、各種の「揭帖」、「招帖」及び排外書の流行であつたであろう。後者については光緒二十六年の四月二日(一九〇〇年四月三十日)附で、總理衙門がコンガアに多數の排外書の押收燒棄せられたことを報じた文書が、FRUS, 1900の一二三頁以下に收められている。又前者についても我々の手に残された若干の掲帖の文面を通覽すると、或るものはあたかも官府の諭令の如き調子で、村

莊の住民に教民の驅逐を命ずる。「中原各省ノ集市・村莊人等ニ知悉セシム。茲ニ天主教並ニ耶蘇教堂、神聖ヲ毀謗シ、上ハ中華ノ君臣ヲ欺キ、下ハ中華ノ黎民ヲ壓ス。神人共ニ怒リ、人皆緘黙ス。以テ吾等ノ俱ニ義和神拳ヲ練習シ、中原ヲ保護シ、洋寇ヲ驅逐シ、教民ヲ截殺シ、以テ生靈ニ塗炭(ノ苦)ヲ免レシメントスルヲ致ス。之ヲ示スルノ後、村莊人等ニ曉諭シ、爾等何レノ莊ナルヲ論ゼズ、モシ教民アラバ急速ニ驅逐セヨ。自退シテ教堂及ビ伊等ノ房屋ヲモツテ、俱ニ各ト延燒シテ留マラシムルナカレ。誰カモシ信主之人ヲ招留・抗違隱匿スルモノアラバ、吾等到ル處一例ニ問罪シ、火ヲ用テ焚化シ、以テ制肘ヲ致サン。……違フ勿レ、特ニ示ス。光緒二十六年五月一日、義和拳具ス」。

或る場合には詩や詞の形式を取つて、洋教の不倫と「義和拳」の「神威」とを歌い上げる。「神助舉、義和團、只因ル鬼子ノ中原ヲ闢スニ。勸ニ奉教、乃闢天、神佛ヲ敬セズ祖先ヲ忘ル。男無レ倫、女鮮レ節、鬼子ハ人ノ生ム所ニ非ズ。如不レ信、仔細看、鬼子ノ眼睛都ベテ藍ヲ發ス、不レ下レ雨、地發レ乾、全クコレ教堂ノ天ヲ止住スルナリ。神爺怒、仙爺煩、伊等山ヲ下ツテ道ヲ把ツテ傳ウ。……神出レ洞、仙下レ山、扶助ス人間拳ヲ把玩スルヲ。……大法國、神膽寒、英吉・俄羅勢肅然。一概ニ鬼子ヲ全ク殺盡シ、大清一統昇平ヲ慶セン」。

一方では特に乾魃や水害等の天災を、洋教の所爲だとして攻撃し、群衆がこの攻撃に、参加することを要請する。他方ではそのような災害が間もなくいよいよはげしくなり、義和拳を信奉する者のみが、災害と死とをまぬかれるであらうと豫言する。「天有レ眼、地有レ眼、水翻ツテ石亦翻ス。癸未ノ乾(魃)ハ乾ニ算セズ。丁亥、子丑ハジメテ乾ニ算ウ。貧者モ一萬ニ一千ヲ留メ、富者ハ只留ム一二三。……人好事ヲナス意ヲ存セズンバ、死字眼前ニアリ。五谷(穀)高山ニ種エ、平地ニ火烟ヲ起ス。東一搬、西一般、搬來搬去シテ人烟ナシ」。「モシ信ゼザル者アラバ、只看ヨ丁

亥子丑ノ年、災難無數、屍骨堆山。⁽³⁰⁾光緒二十六年(一九〇〇年)は庚子、二十七年(一九〇一年)は辛丑の年に當る。

或は農民の關心を引きつける爲に、疫病の療法や、護符・呪文の傳授とくみ合せて、排外を主張し、義和拳を宣傳する。「佛門義和拳、上ハ能ク國ヲ保チ、下ハ能ク民ヲ救フ。……今外國人、井内ニ毒藥ヲ暗下スル者アリ。烏梅七個、杜仲五錢、毛草五錢ヲ、水ヲ用ヒテ煎服セバ解クベシ。」⁽³¹⁾「本年ノ瘟疫ハ、清溪縣……各處ニアリ。名ヲ烏鴉病ト曰ヒ、半ハ嚮ニ即チ死ス。神藥無效、死者其ノ數ヲ計ラズ。……避瘟符呪、天師整令⁽³²⁾呪字、瘟神遠行⁽³²⁾呪字、速退他方 魏詔萬⁽³³⁾花押」。

そして屢々そのような掲帖には「各帖ヲ見テ、連ネ得テ三帖ヲ傳ウレバ、一家免ガレ、十帖ヲ傳ウレバ、四隣災ヲ免ガレン。モシ見テ傳エザレバ、必ラズ刀頭ノ罪ヲ受ケシメン」とか、「十張ヲ傳寫セバ一家安ク、百張ヲ傳寫スレバ、修身ノ平安ヲ保スベシ。若シ字ヲ識ラザル者ハ、僅ニ口傳スルモ、亦是レ功德ナルベシ。知ツテ傳エザレバ、性命全ウシ難シ。」⁽³⁴⁾等の文言がつけ加えられて、手書による復寫や、口頭による傳承を通じて、意外に強い傳播力を、もつたであろうと推察せしめる。乾魘の年の黄土の埃にまみれて、村々の墻壁にはられたそれ等の掲帖は、貧しい農民や「無賴」を激發して、彼等を拳廠(壇)や師兄の許に、結集しただけではあるまい。一方では外國人とキリスト教に反感を抱き、動亂を待望する、文字のある人々をも刺激し、より一層多くの掲帖が、次々にそれぞれの作製者の、教養の種類や程度を反映する文體と形式で創作され、それが動搖の擴大を、巡環的に加速したにちがいない。

そのような掲帖を讀みきかせられ、廠・壇の威勢を慕つて、集つて來た人々の出自は様々である。平原事件前後動搖が主として農村地帯を蔽つていた當時でも、拳衆は決して單に農民だけではなく、多くの外省人、游勇や流民をふ

くんでいた。動亂が天津・北京のような都會地へ擴大すると、都市の遊民や無産者や普化僧だけでなしに、附近の州縣からも群衆が集合した。「刻下津邑ニ聚衆セル拳匪甚ダ多シ。本津所有ノ數百人ヲ除イテ計エザルノ外、青・靜・滄・鹽・南慶ノ各州縣、及び他處ノ各鄉邑ヨリ來ル者、約二萬餘人アリ。出自一處ニ非ラザルニ因リテ、裝束モ亦各各相同シカラズ。小掛ノ外ニ一ノ紅色ノ兜肚ヲ着ケシ者アリ。年已ニ三四十歳ニシテ、各々一ノ紅辮頂ヲ着クル者アリ。尙一某處ノ匪首ニシテ身ニ黃綢ノ大掛ヲ着ケ、街ニアリテ行走スルモノアリ。怪誕離奇、實ニ思議スベカラズ。」
「コレニ由ツテ風聲ノ播ル所、相繼デ（北京ニ）來ル者日ニ千ヲ以テ計ウ。隨處ニ拳廠壇場ヲ設立シ、觸目皆是ナリ。」
「景城ニ義和拳ヲ演習スル者、童子多キニ居ル。土農工商ヲ論ゼズ、以テ各行貿易ノ人ニ到リ、學ブコトヲ願ワザルモノ無シ。」⁽³⁷⁾

一方では勿論「津地ノ土棍、俗に「混々」ト言ウ。分黨シテ雄ヲ稱シ、法紀ヲ藐視ス。……往々白書刀ヲ持テ行キ、人命ヲ以テ草管トナシ、敢死ヲ以テ能事トナス、……拳術ノ播傳ト共ニ遂ニ相率イテ黨ニ入ル。……津兵城ヲ破ルニ到リ、遂ニ紅巾變ジテ洋僕トナル……料ラザリキ其ノ昔日ノ拳匪タリシ者、今日ノ漢奸ナラントハ。」⁽³⁸⁾と言われるような、都市の遊民や無頼者流をも多く含んだことは當然である。しかし他方前稿でふれたような、光緒二十四、五、六年の天象、人災、必らずしもこの年にはじまつたわけではない農民の極度の貧困、多くはそのような貧しい人達の中から出身し、しかも彼等によつて衣食していた僧道や紳士の介在を考えれば、この場合にも動搖の支配的な主體が、一方では貧しい農民、僧侶、道士、他方では不満な知識人や郷紳にあつたことは、疑がえないのではないかと思う。⁽³⁹⁾
彼等は極めて短かい、簡単な呪文を傳授シ、護符を發行し、様々な神々を禮拜する儀式を作つた。又傳承せられた

八卦教の教義に合せて、自からを乾卦だとか坤卦だとか稱し、それに應ずる紅色の服装や、黄色の標識を身につけた。⁽⁴⁰⁾拳術を練るばかりでなく、所在の町々で刀刃を打たせて武装した團體を形成した。そしてやがてその中から、二つの一見すると相反する傾向が生れた。一つは、反官的、暴動的、いわゆる「起義」的な動きである。第二は親官的、團練的、御用團體的な傾向である。

義和學がはつきりと反官・抗官の動きを示したのは、前述の如く平原事件にはじまる。平原の蜂起の鎮壓された直後にも、直隸省吳橋の知縣勞乃宣が、光緒二十五年十一月七日（一八九九年十二月九日）附で、「義和拳黨ノ情形ヲ稟陳」した報告に、「學黨恣横ノ氣、日一日ヨリモ甚ダシ。動モスレバ輒チ衆千百ヲ擁シ、槍械ヲ執持シ、官ト譁競ス。地方官手ニ寸兵ナク、一タビ其ノ鋒ニ擲ラバ、立ドコロニ巨變ヲ生ゼン。含垢忍辱セザルヲ得ズ。」⁽⁴¹⁾と云う通り、やゝもすれば官をしのぐ風を生じ、むしろ地方官が之に迎合せざるを得なかつた。特に後に述べる涑水事件で、二度官兵と戦かい、しかも楊福同の率いる小部隊との戦闘に勝つてこれを全滅せしめてからは、彼等は公然と路に逢う官吏に喝令して轎馬を下り、脱帽佇立せしむるに到つた。⁽⁴²⁾「土娼」出身の黃蓮聖母は、督署に出入して制軍裕祿と爾汝を以て交り、隨意に軍械糧米を指索した。⁽⁴³⁾かつて拳民を統制し、或は彈壓したことのある官吏に、彼等が復仇し凌辱を加えた事例は枚擧に暇がない。⁽⁴⁴⁾平原事件においてすでに李文成は明裔と稱し、「本明」和尚と事を共にしたことは前述したが、その後も例えば武昌城南に聚族居住した某姓の「十八歳ノ童子」は、「僞」王を稱して拳民の尊崇を集めた。⁽⁴⁵⁾一言で言えば元來清朝の側に立つて外國人の勢力を掃滅すると誇號した義和拳は、次第に反官的、革命的な傾向を示しはじめるのである。それにも拘らず他方で、彼等が清廷や官吏と結合するような志向をも示す、と云うのは何故か。そ

れは何よりも清廷と滿州官僚の一部に、きわめて強大となつた拳民達（拳民）の力を、抑壓するよりはむしろ利用しようとする動きを生じ、それが西太后を通じて宮廷の主流を占め、中國の政府が彼等の行動を公認、組織、援助しはじめらるゝのである。そのような變化を明らかにするためには、しかし先づ涑水事件の經過について、簡単にふれなくてはならぬ。

(1) A・H・スミンが十月三十日（十二月一日）に、アメリカン・ボォヤ・シミンヨンの一接點 Pan-chuang から北京のロンドンに宛つた電文。"Boxer rebellion, twenty counties Shantung, chili; rapidly spreading; pillage, arson, murders increasing; avowed object kill Christians, exterminate foreigners; Unless four legations combine pressure, Pan-chuang, Lin-Ching, Chinanfu Americans consider situation almost hopeless." (FRUS, 1900, p. 98, Subinclosure, A. H. Smith to Judson Smith. Dec. 13, 1899. 及び同文書集、八一頁、同封文書第三、十月三十日（十二月二日）附、ロンドンより總理衙門宛参照。

(2) FRUS, 1900, pp. 97—100, Incl. in No. 234.

(3) FRUS, Ibid, p. 111, Mr. Hay to Mr. Conger. 中では、これは教民側が拳民側を襲撃した、との報告を問題として、ロンドンガンの注意を喚起しようとする。

(4) 拙稿「義和拳亂の社會經濟的背景」一橋論叢、二八卷四號。ロンドンガンの報告も之にふれてゐる。"The present conditions in this province are most favorable to such a movement. The people are very poor; until yesterday practically no rain has fallen for nearly a year, plowing ains not and can not be done,.....the whole country is swarming with hungry discontented hopeless idlers, and they are ready to join any organization offered." (Conger to

Hay, May 8, FRUS, p. 122)

(5) 劉孟揚「天津拳匪變亂紀事」上、「二十六年歲次庚子、其術已流入天津縣。每日有人在南門外、瑞和成機器磨坊後寬闊地方習練、河北一帶亦有之。」(「義和團」第二冊、八頁)。「光緒二十六年二月初二日、欽命直隸等所……覺羅廷爲凱切曉諭、嚴禁邪教惑人、匪徒構衅事。……近來義和拳匪假托邪術、惑衆滋事、並拒敵官兵、不服彈壓……前蒙督憲派委文武大員、帶兵前往河間一帶查辦、所有拒敵官軍之匪首、我已臨陣拏獲、或已當場擊斃……」(「光緒二十六年正月二十三日、欽命……總理直隸巡防營務所即補道、張、爲曉諭事。照得本軍門奉督憲札飭、親率大軍前來河間、深、冀一帶、巡察拳民、隨時彈壓……」)(勞乃宣「庚子奉禁義和拳彙錄」——「義和團」第四冊、四七九—四八〇頁)。

(6) 佐原篤介・浙西滙隱同輯「拳亂紀聞」(「義和團」第一冊、一〇八、一〇九、一一〇、一一一頁)。尙惲毓鼎「崇陵傳信錄」(同上、第一冊、四七頁以下)は、「京師演拳、始於三月間、不一月、其勢漸盛。」と言っている。「拳亂紀聞」が擧げている當時の天津に見られた掲帖の一例は次の如きものである。「着爾耶蘇教各教堂知悉、今限爾一禮拜內、教堂內之人悉行離開各教堂、均由本會中神人居住、如敢不遵、即須用術將爾各教堂房屋悉行折毀、縱火禁燒、彼時悔之晚矣」。(同右書、一〇八頁)。

(7) 前掲、佐原等、「拳亂紀聞」(同右、第四冊、一〇九、一一一頁)。

(8) 光緒二十五年十一月二十二日(一八九九年十二月二四日)附、「欽命……直隸准軍右翼兼統分防滄州練軍馬步各營……梅欽命直隸巡防營務處即補道……張、爲曉諭事」(勞乃宣「庚子奉禁義和拳彙錄」所收、「義和團」第四冊、四八〇—一頁)。

(9) 光緒二十六年二月二十五日(一九〇〇年三月二十五日)附、「欽……陞吳橋縣正堂……勞、爲出示曉諭事」(同右、同冊、四八三頁)。

(10) 支碧湖「續義和拳源流考」(「義和團」第四冊、四四三頁)。

(11) 祝芾「庚子教案函牘」(「義和團」第四冊、三七〇頁、三七四頁)。

佐原篤介・浙西滙隱「拳事雜記」(「義和團」、第一冊、二三八頁)。

(12) 劉孟陽「天津拳匪變亂紀事」、卷上(「義和團」、第二冊、二五一六頁)。

(13) 註一一に同じ。

(14) 佐原篤介「拳亂紀聞」所收、「紀濁流鎮拳匪始末」(「義和團」第一冊、二一九頁)は言う、「該鎮(濁流鎮)拳匪起手之初、本無頭目。時有白溝河向爲船戶之張德成、裝運舖商貨物、停泊該處、因向該舖算取水脚。途遇三童正在場內演拳。張見之曰、是僞拳也、某一指則不復動、試之果驗。適有本鎮好事之孫六・周某等、素行無賴、無惡不作。乃掛張曰、「閣下莫非某壇之仙師手」。張即引領而應曰、「然」。於是孫、周遍告閭鎮居人、極力奉承、共議立壇、推張爲壇主。初在居民處苛斂以作用度。次則蔓延四處、又在河道私設關卡、凡過往船隻、肆行訛索、否則以借查奸仇爲名、肆意劫掠、……張又陰使人密招四方拳匪來鎮朝見、謂之「萬國來朝」。該鎮更覺猖獗異常、橫行無忌。……これに似た記事は羅惇融「庚子國變記」(中國歴史研究社編「中國内亂外禍歴史叢書、庚子國變記」民國二十八年上海の二八頁にも見える。元より傳説で、細部に信じがたい點はあろうが、しかし恐らく拳門の「師兄」達の生成事情を窺う一史料たることを失わない。

(15) 羅惇融「庚子國變記」(同右四頁)。羅惇融の傳える曹福田の行狀は次の如きものである。「曹福田、天津靜海縣人、本游勇、嗜鴉片。無以自存、亂煽惑。初至津、發土城樓、詢租界何處、土人言東南方、即伏地向東南叩首、良久起曰『洋樓燬矣』。以東方烟起、萬衆悚然。蓋適河東民居被焚也。既入城……聞拳壇令閭郡持白齋、諭無須、言『我亦飲酒食肉也』。聞洋貨店多被毀、亦言『無須、洋貨入中國久、商民何罪』。津民以是尤信奉之。福田室中懸神像、關帝・趙子龍・二郎神・周倉也。另供木主、曰聖上楊老師。福田整隊赴前敵、以洋鐵造鼓吹、大螺、紅旗大書『曹』字、側書『扶清滅洋、天神天將、義和神團』。福田騎馬、載大墨昌眼鏡、口銜洋烟捲、長衣繫紅帶、緞靴、背負快鎗、腰挾小洋鎗、手持一稜稻、語路人往觀戰……」。 (羅惇融「拳變余聞」——内亂外禍歴史叢書「庚子國變記」所收、二九頁)。

(16) 「光緒二十五年間、天津突來一窮和尚、蓬頭跣足、遊行街市……聞張德成來津乃追門拜訪曰、「備才來耶」。張曰、「備從何日來的」……和尚名海乾、……愚民喜相告曰、「洋人祇怕海水乾……洋人必從此滅矣」(劉孟揚「天津拳匪變亂紀事」(義和團、第一冊、二六頁)。

(17) これも本名であるかどうか分らない。李文成は乾隆の白蓮教亂に際して、四川に横行した頭目の名と同じだからである。

(18) 管鶴「拳匪聞見錄」(「義和團」、第一冊、四八七—四八八頁)。紅燈照について、佚名「天津一月記」に言う。「又有紅燈照、係孀婦・處子所練。初練時用銅盆一具、內貯清水、婦女夜靜時閉戶念呪、能緣盆口而行。左手執紅巾、右手執扇、煽動風來、即徐々起、五日後可凌空。上升數百丈、分赴各國焚其房舍、目今外洋十八國已滅十六國等語。……於是津郡女子多有練習紅燈照者、父母不能禁。彼は紅燈照その他の靈顯を説くのは多く保身の計の爲にしたのだ、と言う。「余寓青縣劉姓家、劉翁故稍讀書者、一日呼余出看紅燈罩。指空中黑雲一片曰、「此中無數紅衣女子、即紅燈罩也。」余無所睹、而途人紛々傳説、指天畫地、確切不移、劉翁亦隨聲附和曉々不休。余不解。後始悟劉翁實爲保身計、……當時之匪罔可知」(管鶴「拳匪聞見錄」、「義和團」、第一冊、四八八頁)。

(19) 繩惇齋「拳變余聞」(前掲「庚子國變記」所收)、二八頁。

(20) 佚名「天津一月記」(「義和團」、第二冊、一四二頁)。

(21) 「拳匪每一頭目立一壇、自京津至山東德州、計五十餘壇、張・李二匪首、在京分職不勻、自相吞併、焚段甚慘」(佐原篤介「拳事雜記」、「義和團」、第一冊、二四一頁)。「每一壇豎大旗一對、上書『天兵天將、扶清滅洋』」(劉孟揚「天津拳匪變亂紀事」、「義和團」第二冊、七頁)。「拳匪相繼入城、借廟宇設壇、練習拳勇、已乃盤踞民房、豎『保清滅洋』大旗、造七字歌謠、榜揭通衢」(胡思敬「驢背集」、「義和團」、第二冊、四八五頁)。「光緒二十六年五月十七日、午間傳聞天津土棍王某、在城內三義廟、樹義和團旗、設壇聚衆、無業游民、紛々往投。……裕祿……飭保甲局派勇四名護壇、於是氣餒大張。城內外聞三義廟設

壇弗禁、相率立壇。兩日間城內立壇十余處、城外二三十處、每處或數百人、或數十人、附近村鎮……已撤壇斂跡、至是復起。」
〔佚名、「天津一月記」、「義和團」、第二冊、一四一頁。〕

(22) 前節(二)、註一〇參照。

(23) 例えば祝節、庚子五月十三日(一九〇〇年六月九日)「稟督藩・臬憲、請勒令各屬、撤辦拳匪、免致互相推諉稿」に言う。
「於三月初間、開縣屬北汝河村、由定興倉巨村邀來拳師、設廠練習」。(義和團、第四冊、三八〇頁)。又馬毓桂「致獻縣教堂法教士葛光被安輯教民書」にも曰う、「商請呂軍門、統帶官兵二十營、來河間駐紮、痛剿拳匪、刻已將老林莊拳廠剷洗。查河間東北兩面拳廠甚多、擬分兵次第進剿」。(同上第四冊、三九九頁)。

(24) 「津郡拳匪始靜海屬之濁流鎮、稱天下第一團、直督裕祿不禁之。漸延入郡城、設旗挾刃遊於市、轉相煽誘、旬日之間、壇林立、業治鐵者、家々鑄刃、丁々之聲、日夜相續、若鈴鐸之互答」(羅惇愚「拳變餘聞」、前掲「庚子國變記」二六一—二七頁)。

(25) 「愚民傳說、團中用一銅釜造飯、釜容米二升許、數千萬人隨取隨滿、永無盡竭、練拳三日、即可出戰」(前掲「天津一月記」義和團、第二冊、一四一頁)。「立團之初、有贈米麵者。曰無需也。釜中之物、食之不竭。費用他人贈乎。……團中曰老師每人給錢二百文。懷於腹中、無論如何費用、二百之數、不減少也」(同上、一四二—一三頁)。

(26) 「各團在城內皆劃地管轄、莊則巡街、遇教民即誅、夜即巡更、遇形跡可疑者、指奸細即殺之。於是仇殺蜂起、居民無寧日。團所轄地、皆須聽其號令、初令各家夜々燒香、又令各家門懸紅旗、上書「義和團大德大勝」、又令各家晚間皆懸紅燈、以迎紅燈照、蓋無敢不遵者。……未三日、即令每家備麵餅五張、又令有力者施送米麵、又向富戶勒捐銀米。遵者不入其門、違則合家不保」。(同右「天津一月記、同上、第二冊、一四三頁)。

(27) 逸名「雜錄」(「義和團」第四冊、一四九頁)。

(28) 佐原篤介等「拳亂紀聞」(同右、第一冊、一一二頁)。

- (29) そこから例えば直隸順天府の齊家司馬蘭村の場合のように、村が義和拳團を設立し、これが村規として拳民的規律を村民に強制する場合さえ生ずる。同村の掲帖の例、「司馬蘭村、虔誠設立義和神團、爲此醜驗嚴規村坊事。竊有天主教……折廟宇、毀佛像、估民墳、萬惡痛恨、以及民之樹木禾苗、無一歲不遭蟲旱之災、國不太平而民不安、怒惱天庭。今以上天大帝垂恩、諸神降下、赴垣設立壇場、神傳教習子弟、扶清滅洋、替天行道。」(前掲「雜錄」、義和團、第四冊、一四八頁)。
- (30) 同右「雜錄」所收、「掲帖其一」、「掲帖其二」(同右、第四冊、一四九頁)。
- (31) 同右、「掲帖」其五。
- (32) 呪字は月を横に三つ併書し、その扁に毛字を書いて、末劃を延長し、呪字全部の周圍を、二週せしめたものである。
- (33) 註三一に同じ。「掲帖」其四。
- (34) 同右、掲帖其五、及び同書一五二頁、「增神財神李告白」。
- (35) 劉孟揚「天津拳匪變亂紀事」、上、(同右、第二冊、二〇頁)。
- (36) 柴芎「庚辛紀事」(同右、第一冊、三〇六頁)。
- (37) 佐原篤介等「拳事雜記」(第一冊、二四〇頁)。
- (38) 菅鶴「拳匪聞見錄」(同右、四七一頁)。
- (39) 當時の演拳拜呪の様を述べた記述は枚擧に暇がない。「天津拳教、願學者、先期報名、次日往見大師兄、以爲可用、卽濡每日往習。……入黨後不飲茶、不茹葷」。(前註「拳匪聞見錄」、義和團、第一冊、四七〇頁)。「練拳法時、教師先劃一圍於地上、……命其入圍。先作三揖畢、閉目立。教師拊其耳念咒語。咒語不一。今舉其一曰『請々。志心歸命來。奉請龍王三太子、馬朝師、馬繼朝師、天光老師、……短棍老師、要請神仙某某等(其名不一定、有猪八戒、孫悟空等名隨意呼之)、見槍舜槍、見刀弄刀、聽我號令、卽便族行。』念此咒不久、飄身仆地上者、教之。不然者、爲不可教、斥之。」(前掲佐原篤介「拳事雜記」所收

「團匪莠言」、第一冊、二九九頁。

(40) 義和拳が白蓮教の、従つていわゆる八卦教の流れを引いたものであると言ふ勞乃宣の説は、恐らく正しいであろう。それは白蓮教や八卦教をふくむ、長い、長い、會黨教門の傳統に基づいて、展開した動きに他ならぬから。しかしそれにもかゝらず、初期の義和拳に、そのような先行教門の教義が、どれほど深い關係をもつたかは少くともよく分らない。そして特定の師兄や拳衆が、自から乾卦だとか坤卦だとか稱して、或は黄色の、或は赤色の標識や衣装をつけ、様々の教理めいたものを説きはじめるのは、むしろ比較的新らしく、恐らく光緒二十六年（一九〇〇年）の春になつて、動搖が京律地區へ波及してからのことである、と考ふる。

(41) 勞乃宣「拳案雜存」所收、義和團、第四冊、四六九頁。

(42) 「此時津地拳匪益無忌憚。其在街前行走時、若遇官弁坐轎者必喝令下轎、騎馬者必喝令下馬、且必脫帽旁立、不從則揮刀恐嚇、怒目相加。」（劉孟揚「天津拳匪變亂紀事」同右、第二冊一〇頁。）

(43) 「所謂黃蓮聖母者一土娼也。匪黨奉爲神。載在大舟、上結黃紅彩、日優游中河。……聖母至督署由中門入、與制軍分庭抗禮、互相「爾・汝」。軍械・糧米、隨意指索。後律城陷、爲聯軍所獲、……遂載往歐美各州以爲玩物云。……余友善譚、因言一土娼而與制府抗禮、受貴公子之拜、極爲可談矣。然吾不取、所最可談者、則更能遊歷歐美各州……」（管鶴「拳匪聞見錄」、第一冊、四八七頁。）

(44) その最も著しい事例は、天津附近における聯合軍との戦闘中に、外國軍隊によつてでなく、拳衆に通謀した自身の部下の手で殺された、將軍聶士成のそれであろう。聶士成は太平天國や捻亂の鎮壓にも従事した合肥出身の直隸提督で、武衛軍を率いて蘆臺に駐屯し、黃村、郎坊の間で鐵道を破壊しようとした拳民を射殺したことによつて、亂戦中に數十槍を被つて死んだのである。（前掲羅惺「拳變余聞」、「康子國變紀」所收三一頁を見よ。）

(45) 佐原篤介「拳事雜記」(第一冊、二四一頁)。

六 涑水教案と清廷、拳民の團練への包攝

平原事件を拳民が、公然官兵に對して抗戰した、最初の事例であるとすれば、光緒二十六年四月(一九〇〇年五月)の涑水事件は、そのような官軍との戰鬪において、拳民側が勝ち、鐵道や停車場を破壊し、城市を占據し、調査のために清廷から派遣された官吏と、對等に交渉しはじめる、最初の機會である。清廷の義和拳に對する態度は、この事件を境にして變化し、從來基調としては民教紛争に對し中立的で、従つて少くとも拳民側の積極的な攻撃は、これを抑止しようとしていたのに對し、改めて義和拳を現實に強大な力をもつものとして認識し、むしろこれを利用して、排外自存の目的を達成しようとするに到る。平原事件と毓賢の處置とが、義和拳を擴大させ、これを國內の大亂たらしめた契機だとすれば、涑水事件とこの頃からの清廷の中立主義の揚棄は、それを對世界戰爭(War against the world)にまで發展させる、一つのきつかけをなすものだつた。たまたま平原事件につき蔣楷の「平原拳匪紀事」があるように、涑水事件については當時この縣の知縣だつた祝芾の「庚子教案函牘」があり、又親しくこの反亂の鎮壓に従事した、直隸新城の武衛軍都統、楊慕時の「庚子勦辦拳匪電文錄」が存する。共にこの事件に關する當時公私の文書を蒐集傳承したものである。先ずこれらによつてこの變亂の經過を述べ、ついでその義和拳亂の展開に對する影響を考えよう。

涑水事件、つまり同縣の高洛村に、數千、後には萬餘の拳民が聚衆し、官兵と戰つて副統楊福同以下を敗死させた

事件が、人の耳目を引きはじめるのは、光緒二十六年の四月二日（一九〇〇年四月三十日）以後であるが、その原因になつた民教紛争は、その十數ヶ月以前、光緒二十四年の十二月（一八九九年の二月）に起つてゐる。即ち同年の年底に、この村の地保閻洛奉、香頭閻洛計、管事閻奉（鳳）、閻五章、閻洛福、單九計（久經）等は、「迎神賽會」をもよほして「會棚」を起塔するに際し、南高洛村の教民の屋後に、地を選んで懸燈しようとした。⁽²⁾ 勿論キリスト教の教儀が、外神の禮拜を認めず、従つて中國人教民は、そのような村の祭禮にも、参加することを嫌うことを知つての上で、である。迎神賽會と言ふのは、農民が舊曆の年末に、儀仗、蕭鼓、雜戲を具して、農業に關する神を村に迎え、舊年中の農事の畢つたことを報じ、田神に酒食を酬いる、村の祭を言うのである。その爲の小屋がけ（搭棚）や懸燈の設置をめぐつて、地保とか香頭とか言う村の領袖者達と、教民との間に紛議が起つたらしい。教民が搭棚を移轉するよう交渉している間に、閻洛奉達は教民の「禮拜公所」に闖入し、祭物を破壊した上、教民等を邪教徒として、祝芻の前任者であつた、高正肅に告發した、と教士杜保祿は訴えてゐる。⁽³⁾ これに對して非教民側は、從來高洛村では舊正月毎に、「閻街ニ搭棚シテ神明ヲ慶賀」するのが舊慣であつたのに、教民張才等は「邪教ヲ崇信シ、身等（閻洛奉等）ノ伊教ニ違フザルヲ嘖リ、棚内ニ找至シ、辱罵シテ止マズ、神像ヲ撕毀シ、會棚ヲ燒カシ」としたのが、事の起りだと訴えたと言ふ。⁽⁴⁾ いづれにせよ他所でもくり返して起つたように、教民が村の祭禮への参加（特にその費用の據出）を拒否し、教士もキリスト教の教儀に従がひ、當然のこととしてこれを援護し、村政の執行者でもある、村祭の香頭や香會の會首と、教民との間に紛争を生じたものであらう。⁽⁵⁾

當時の涑水知縣高正肅は、高洛村の教會を調査し、多少の被害があつたことを確認して、閻洛奉・閻洛福等を拘留

した。閻洛福の子、文生閻肇修は、或は「紳士」劉坊を介して安肅の教士席某に調停を乞い、或は北京の教士樊某に央求して、遂に、1 以後永遠に教案事件を起さない旨の誓約書二通を教堂と縣とに提出し、2 罰として教士と、教民とにそれぞれ宴酒數席を設け、3 紋銀二百五十兩を教堂に賠償し、又 4 従來民教紛争の種子になつていた高洛村内の空地一段から、樹木を伐出することを教民側に認め、辛うじて閻洛福等の釋放を賈い得たのであつた。右の空地は光緒十二年（一八八六年）以來、村の共有地で、村民は樹木を伐截した收益數十串文を元本として、その利子を村の公費に充てていたものであつた。教民側は閻洛福等の贖回に際して、この樹木を伐採する權利を獲得しただけでなく、過去に遡つて「此ノ項ノ本利錢一百二十千」の拂戻しをも要求して、村民の承認を得た、と言ふ。村の領袖達を相手とする紛糾が同時に全村民に對する對立を激成したことは、當然だと言ふべきであらう。當時の涑水の知縣高正肅が、かくの如き教民の主張を默認したのは、教士杜保録が易州の知州朱某にはたらきかけて、上部から壓力を加へさせたことによるらしい。いづれにせよこのことが高洛村内外の農民一般、特に閻洛福に教民への深い反感を醸成したのである。

光緒二十六年（一九〇〇年）の四月になつて、義和拳の傳修がこの地方に擴まつた時、だから閻洛福の子閻肇修が先ずこれに加わつて、「首先學習」し、拳會をも組織したことは極めて自然であつた。知縣祝芾は一度閻洛福を縣署に召喚したけれども、閻姓の一族の保證によつて釋放した。所が四月の二日（陽曆四月三十日）になつて、南・北高洛村には多數の拳民が聚まり、武器を備へ、公然練拳している、との風聞が傳わり、同時に附近の汝河・下莊・婁村一帯にも、練拳の形跡が明らかになつた。そこで祝芾は各處に郷村の紳童を呼集めて、しきりに之を諭止しようとしたが、

農民の「蠢惑日ニ甚ダシク、舉邑狂セルガ如ク」、拳民ノ活動モ「此ニ出デ、彼ニ入り」、祝市をして應接に暇なからしめた。そこで遂に四月六日(五月四日)祝市はこの状況を省に報告して、馬隊二三哨の派遣と駐屯とを稟請した。⁽⁸⁾しかもこの派兵が實現する前に、四月十四日(五月十二日)、北高洛村には拳民が聚衆して、教民の住屋七十五間、「念經公所」七間を焼き、南高洛村の地保をふくむ教民二名を拉置した他、「男女大小二三十口」を殺傷して、井中に投入した。⁽⁹⁾このことが翌十五日(十三日)報告せられると、直隸省からは分統楊福同・觀察張毓渠が委員二名と共に派遣せられ、楊福同等は十七日(十五日)、定興の馬隊兩哨(二十名)を率いて、高洛村大佛寺の拳廠に到り、すでに解散した拳民の殘餘七名、幼童十三人を捕え、「黃紙牌位三個」を押收したが、武器は發見し得なかつた。然るに馬隊兩哨を定興に還すと共に、十八日(十六日)早朝には二度拳民が聚衆し、同日午後楊福同等が大佛寺に行くと、二度牌位が設けられ、拳民二十數人、小銃・刀・矛二十餘件、米・麵三百餘斤、燒酒百餘斤、食器數百具が集められているのを發見した。⁽¹⁰⁾委員夏詒垣・呂增祥及び楊福同等は、逮捕した教民を訊問し、又教民の屍體を搜索したが、拳民は何人が首長であるかを容易に告げず、又村民には衣服辮髮に紅中をつけたものが十中八九を占め、これに轆轤や鍬鎬を借りようとしても應えず、屍體を發掘せしめようとしても従がう者がなかつた。さらにこの夜高洛村には村外から拳民二三百人が集まつて楊福同等を襲い、戦闘の後五六十名の死者、數十名の傷者、數十件の武器を遺して一度は四散した。しかもこれにより動搖は却つて擴大し、四月二十三日(五月二十一日)には、二三千人の拳民が馬隊三十名・步隊四十名を率いた楊福同を同村附近の石亭に包圍し、楊福同以下三名を戦死せしめた。⁽¹¹⁾四月二十七日(五月二十五日)には、楊福同に代つて新城に居た武衛軍の統領、楊慕時が步隊三營を以て派遣せられ、高碑店附近に駐兵したが、四月二十九日

(五月二十七日) 拳民は先づ涿洲を襲つて、蘆保線(京漢線)の鐵橋を破壊し、楊慕時が涿洲に向うと、勿ち高碑店・長辛店にも現れて、停車場その他の鐵道施設を焼き、電線を截り、路線を焚燬した。聚衆した拳民の數は多く、附近の村民から戸毎に黃紙をつけた藁束一束づゝを舉出させ、每人これに石油をかけて「點火飛傳」したから、僅少の兵力では到底抑止し得なかつたのである。⁽¹²⁾

直隸總督裕祿は天津・保定から援軍三營の兵を送り、蘆溝橋から保定に到る停車場十七に大站は一哨、小站は半哨づつ配置し、僅かに電線・鐵橋・鐵道を保持せしめたが、他方附近の村莊には到る所拳民が横行し、蘆保線に沿う涿州は事實上拳民に占領せられ、「城門ノ啓開ハ、概シテ拳匪ニ由リ、辦公ノ人ハ城ニ入ルヲ得ズ。城中ノ文武(官吏)ハ具文トナル」状況であつた。しかも庶民反亂の通例として、反亂者と非反亂者の區別は殆んど不可能で、「衣巾ヲ穿起スレバ則チ匪トナリ、衣巾ヲ脱去スレバ則チ民トナル」状態だつたから、楊慕時等も近く大兵が發せられる前に、首倡は自告せよ、脅徒は解散せよと空しく諭令するだけで、事實上動搖の擴大を見送つていた、と言ふのが實情だつたとやつてよい。⁽¹³⁾

當時たまたま德州から獻縣・雄縣・新城を経て涿州を通過した旅行者の書翰には、次の如き一項がある。「(五月)初二日、新城ヨリ前進シ、三家店ニ於テ打尖(休止)ス。義和團紛々トシテ北ニ往クヲ見ル。又行ク十餘里、道傍ノ電桿均シク圻斷ヲ經、火車道上煙火天ヲ蔽ウ。之ヲ途人ニ詢ネテ、始テ知ル馬家舖ヨリ高保(碑)店ニ到ル二百餘里ノ鐵路、廿九日ヨリ燒起シ、火猶才息マザルヲ。申刻涿州ニ到ル。城上皆紅巾・黃巾、刀矛林立シ、(拳民)屯聚スルコト蟻ノ如シ。城廂ノ内外幾ンド二萬人、……涿州ノ牧食ワザルコト已ニ三日ナリト。余下車シテ一刻、彈壓ノ馬隊

二十騎皆洋裝シ、保定ヨリ來リ、南門ニ入り馬ヲ馳セテ北往ス。南城ノ圍匪之ヲ見テ謂ク『奸細城ニ入ル』ト。皆城墻ヨリ下ツテ紛々トシテ北進ス。一時四城及市門皆閉ジ。適マ兩僕署中ヨリ收鞘シテ回ルニ、義和團指シテ奸細トナシ、數十人刀矛齊進シ、二人跪求シテ乞命シ……始メテ逃命ヲ得タリ。是夜四門戒嚴、居民皆抽丁シテ城ヲ守ル。擾亂ノ聲終夜息マズ。」と。涿州の州牧は憤激して飲食を絶つて自殺しようとしたのである。楊慕時が軍門聶士成への報告の中に、「涿州ハ失セズシテ失ス」と言う通り、拳民は戦うことなしに、事實上涿州を占取し得たのであつた。

楊慕時は一方では大兵の將に至るべきことを示諭し乍ら、他方しきりに裕祿や聶士成に援軍を要求するけれども、應ぜられない⁽¹⁵⁾。五月九日(六月五日)の朝には高碑店の楊軍は、來襲した拳民と戦かつて、百餘人を斃したが、それはわずかに現状を維持しただけで、鐵道連絡は依然涿州附近で中斷せられている。楊慕時は反亂の眞唯中に孤立して、「一偶ヲ困守ス」るに耐えなかつたから、豐台・楊村の官兵と呼應して、一舉に涿州を圍攻したいと要請し、五月十一日(六月七日)漸やく聶士成が落堡から兵を進めると聞いた直後に、北京から涿州へ派遣せられた大臣趙舒翹の意圖として、戰鬪行動を停止するように通達せられた⁽¹⁶⁾。楊慕時は或は聶士成に「隣近ハ皆匪ナリ。モシ席捲シ來ラバ、勦スレバ則チ上遊ノ意ニ違イ、戦ワザレバ則チ三營ノ覆没センコトヲ恐ル。……三營ノ性命ハ惜ムニ足ラズ、軍械等ノ件ヲ以テ匪ニ豫ウルハ計ニ非ザルナリ」と訴え、或は涿州の洲牧や趙舒翹に上書して現地の事情を述べるけれども、應答が無いばかりでなく、五月十二日(六月八日)には統領孫壽郷を通じて、次のような書翰を受取る。「刻下義和團ノ事ハ、朝廷剛中堂ニ放シテ查辨セシム。意ハ勸導ヲ以て要トスルニアリ。聞ク貴營高碑店一帶ニ駐シ、義和團ト逼近スト。甚ダシクハ相宜ナラズ。サキゴロ剛中堂の面諭ヲ奉ズ、即チ函ヲ閣下(楊慕時)ニ致シ、速ニ營隊ヲ撤回シ、

再び義和團ト相持スルコトナカラシメヨ、恐ラクハ事端ヲ醸成シ、サラニ辦ジ易カラザラン等ト。此ヲ奉ジ、遵ツテ馬勇郭長清、劉春光ヲ派シ、函ヲモタラシテ前來セシム。請フ即チ營隊ヲ撤回シ、稍々モ遲緩スルコト勿レ。否ラズンバ即チ恐ラクハ中堂（剛毅）ヨリ申飭シ來リ、甚ダ不便ナラン。咎何ノ辭スル所アラシヤ。閣下（楊慕時）ノ當ニ能ク機ヲ見ルベキヲ想ウ也」と。上の書翰には「印封」は無かつたが、内容は明らかに命令系統を無視した命令であつた。⁽¹⁷⁾

楊慕時は剛毅に上書して、一方では從來共敢えて拳民に對して「輕舉妄動」した譯ではないと辯明し、傳諭を奉じて處置益々慎重なるべきを約すると共に、高碑店の駐軍は直隸總督裕祿の命令に出で、又鐵道保護の重責を附與されているから、擅に進退を決することは出来ない、營隊を撤回するにしても、撤去した部隊をどこに向ければよいのか、明示せられたい、と反論する。⁽¹⁸⁾ 剛毅はたしかに吏部の尙書であつて、部隊指揮の系統にはないに拘らず、同じ五月十二日（六月八日）の中に急に北京を出て涿州に到り、情況を視察して、楊慕時が拳民を「誘撃」したのは適當でない旨の御文を下し、⁽¹⁹⁾ 十五日（六月十一日）には軍機大臣榮祿からも、楊慕時の部隊を撤回すべき旨の命令を下させ、⁽²⁰⁾ 翌十六日（六月十二日）には重ねて、裕祿・聶士成からも、又部隊を率いて天津に到るべきことを、楊慕時に命ずるのである。⁽²¹⁾

當時の上諭の實録に収録せられているものを通讀すると、一方では擾亂の直隸地方への波及に伴なつて、稽査を嚴重にし、秩序を回復し掲帖・聚衆・擾亂・焚殺を除禁せよと言ふ諭令は相次いで出されている。⁽²²⁾ 特に光緒二十六年五月二日（一九〇〇年五月二十九日）の上諭は、「近來近畿一帶ノ鄉民拳勇ヲ練習スルモノ、良莠錯出ス。深ク恐ル事端ヲ

別滋センコトヲ。……近ゴロ聞ク拳民中、多ク游勇會匪アリテ、跡ヲ其ノ間ニ溷フト。藉ツテ肆擾シ、其ダシキハ武員ヲ戕殺シ、電桿鐵路ヲ燒クニ至ル。此敢エテ法ヲ畏レザルニ似タリ。其レ亂民ト何ゾ異ナラン。派出ノ統兵大員、並ニ地方ノ文武に着シテ、迅即ニ首要ヲ嚴拿シ、脅徒ヲ解散シ、尙シ敢エテ列仗抗拒セバ、應ニ即チ機ヲ相シテ勦辦シ、以テ烟戒ヲ昭カニセヨ」云々と言つてゐる。前述した通り涑水で、楊福同が戦死したのは四月二十三日(五月二十一日)、拳民が蘆保線の鐵路、電柱を焚毀して、涑洲を占據したのが四月二十九日(五月二十七日)であつた。ここに「武員を戕殺シ」と言う武員が楊福同を指し、「派出ノ統兵大員、並ニ地方ノ文武」と言う「大員」や「文武(官)」が、楊慕時、祝芾等を指すものであることは疑を容れない。五月二日(五月二十九日)には少くとも、北京宮廷は楊慕時に對して、迅速に涑水事件主謀者を逮捕し、事件を鎮壓することを要求しつゝあつたのである。⁽²³⁾

所がそれから五月七日(六月三日)までの數日の間に、清廷に上奏して祝芾や楊福同を非難した者があつた。すなわち五月七日附の上諭には、「軍機大臣ニ諭ス。人アリテ『拳匪ノ滋事(ハ)地方官ノ辦理不善(ニヨル)。請旨シテ懲處セン、並ニ管見ヲ陳ス』ナル一摺ヲ奏ス。(之ニ)據ルニ、『直隸涑水縣ノ拳匪滋事ス。該縣の祝芾、既ニ患ヲ未形ニ消スル能ワズ、事起ルニ及ビ倉卒シ、又復タ其ノ詞ヲ張大シ、遠ニ調兵ヲ請イ、帶兵官楊福同に愆憑シ、(拳民)十餘人ヲ誘殺シ、以テ匪徒ノ反噬ヲ致ス。咎辭スベキナシ』等ノ語ヲ稱ス。裕祿ニ著シテ確切ニ查明シ、嚴ニ從ツテ參辦セヨ。現在幾輔一帶ノ拳匪、蔓延日ニ廣シ。……該督等務メテ各州縣ニ通飭シ、親シク各郷ヲ歴(行)シ、諄切ニ勸導シ、操切事ニ從ガウベカラズ。帶兵ノ員弁ニ至ツテハ、亦當ニ嚴行申誡シ、輕ルシク民命ヲ傷クルヲ得シムルコト勿レ……此ヲ以テ四百里ニ由リ裕祿ニ諭知シ、並ニ榮祿ニ諭令セヨ」と言う。⁽²⁴⁾ 前述の楊慕時に下された劄文と對比す

れば、この上奏者は恐らく剛毅であつたと推察せられる。

涑水事件の祝市や楊福同に對する非難は、平原事件の蔣楷や袁世凱に對するそれと、全く同じである。過早な請兵、不必要な武力行使によつて、動搖を激發し、擴大させた、と云うにある。それと前述の如き現地の實情とを對比すれば、誰しもそこにある大きな喰いちがいに氣づかざるを得まい。しかし反亂の現實と清廷の態度との不適合はこれに止まらない。五月十日(六月六日)の上諭はさらに云う。「教民・拳民ハ均シク國家ノ赤子ナリ。朝廷ハ一視同仁、教・會ヲ分タズ。……昨(五月九日)已ニ順天府兼尹軍機大臣超舒翹ヲ簡派シテ、前往シテ宣佈曉諭セシム。該團民等、即チ遵奉シテ一齊ニ解散シ、各々生業ニ安ンゼヨ。儻シ奸民會匪、從中從瀆煽惑シテ、地方ヲ擾害スルコトヲ希圖スルモノアラバ、該團即行シテ首要ヲ交出シ、律ニ按ジテ嚴辦セヨ。……」。清廷はさらに同日の内に、剛毅を保定に派遣して一視同仁の趣旨を説かせる。元より蘆保線一帶の動亂は、趙舒翹や剛毅の説諭によつて解散し、平常化して「生業ニ安ンズル」ようなものではなかつた。しかしいづれにせよ、趙舒翹の派遣と共に、楊慕時は武力行使を禁ぜられ、拳民の活動を制約するものは、事實上なくなつたのである。

揚慕時は五月二十日(六月十六日)に、部隊と共に保定を發ち、安肅まで鐵道で、以後行軍して天津に向つた。安肅では「友人ノ拳會ヲ熟識スル者」を介して、拳民に「兩ツナガラ相擾ザル」こと、つまり双方攻撃を停止すべきことを申入れたが、途上絶えず拳民の集團から襲撃を被むり、時に拳民の居る部落を迂回して、辛うじて同二十五日(二十一日)天津に返つた。

その後の情況は義和團に關するほとんどの書物にも書いてある。天津ではすでにこの月の十八日(十四日)から

市内の教堂が相次いで焼かれていた。北京でも五月十七日(六月十三日)以後、外城・内城の各處に火災が起り、教堂に對する襲撃が行なわれ、十數万の教民が殺された。五月十五日(六月十一日)には日本公使館の書記生杉山彬が永定門外で董福祥軍に殺されてその屍を剖かれ、五月二十三日(六月十九日)にはドイツ行使フォン・ケテルルが路に虎神營の官兵に射殺された。一方日・英・獨・佛・伊・奧・洪七ヶ國の海軍は、五月二十一日(六月十七日)大沽の砲臺を攻撃して陥れ、又北京宮廷では五月二十、二十一日(六月十六、十七日)に互り、西太后が御前會議を召集し、強硬に主戰論を主張して二十五日(二十一日)にはいわゆる定戰の上諭が下つた。すなわち涑水事件はほとんどそのまま、清國と連合軍との戰爭に接續するのである。そしてそれと共に二十六日(二十二日)義和拳は改めて團練として公認せられ、義民として米、二万石、内帑銀十万兩を與えられ、莊親王載勛・協辦大學士剛毅の統率の下に、官兵と戰線と共にして、東交民巷の列強大使館區域攻撃に参加するのである。涑水事件を境にして、清廷は義和拳を強壓するよりも、むしろ戰力として起動する事に、態度を轉換した、と言つてよい。

以上のような變化に、剛毅が與つて力あつたことは、上述した例からだけでも、推察し得るであろう。當時の通説によれば、剛毅は榮祿と共に、西太后を中心とする宮中の保守的な勢力を指導し、事態を戰爭に導いた責任者だ、と言われる。そのような宮廷内部の勢力關係と、それが義和拳亂の擴大に對してもつた關係については、別に書くことにしたい。

(1) 共に前掲中國史學會「義和團」第四冊、三三一—三六二頁、及び三六五—三九四頁に收載している。

(2) 「庚子教案函牘」、「附錄己亥年(光緒二十四—一八九八年)高前任審斷高洛村民教訟案詳銷、並節錄易州朱直刺札函各稿」

所收、「教士杜保祿原函」、同書、三九二頁。

(3) 註二に同じ。

(4) 「涑水縣爲詳請銷案事」、同右三九二頁。

(5) この紛糾の原因は更に更に遇れば次の如きものであつた、とも言う。「昔年因該村南頭蔡姓、不出會錢。會將其族人閻洛福控告、經斷仍令派出、蔡姓遂投入天主教、閻洛福無可如何、因此懷忿。」(光緒二十五年四月十八日、祝芾、「夏・呂兩委員手摺稿」)。これによれば天主教徒だから村祭を拒否したのではなくて、會錢の納入を怠つたのを追求せられた農民が、天主教に保護を求めたのである。中國の村では村政の事實上の執行者と、村祭の香頭、會首等とは重復し、或は連繫している場合が多い。又村祭その他の費用は攤款、丁役錢その他の公的賦課と、一轄徴收される場合も多いようである。だから中國人教民が村祭費、香會錢を拒否したり、或は之を免れようとする貧民が、教堂や教士に保護を求めたりすることは、意外に重大な、農民紛糾の原因になり得たのだと思う。會・會首・香頭・會錢については、最近公刊せられはじめた「中國農村慣行調査」(同刊行會、第一卷、第二卷のみ既刊)特に第一卷の「村落編」(八九—二二五頁)を参照すべきである。尙同調査の未刊資料、繁城縣寺北柴村、恩縣後家寨、歷城縣冷水溝莊その他の村落資料にもふれるべきものが多いけれども、それについては別に改めて述べることにしたい。

(6) 「涑水縣爲詳請轉銷案事」、同右、三九三—三九四頁。

(7) 同右、三九四頁。

(8) 祝芾、「庚子四月初六日、通稟督・藩・臬・臬・道・州憲、因拳匪日甚、請兵駐紮。」(「庚子教案函牘」、三六九頁。)

(9) 祝芾、「庚子四月十五日、通稟督・藩・臬・道・州憲、因拳匪肆意焚殺請派兵委員查辦」同右、三七一頁。

(10) 「庚子四月十六日、委員夏直刺詣垣・呂大令增祥、電稟藩・臬憲奉飭查辦拳案」、「庚子四月十八日、院委張觀察毓渠・楊

分統雲峯、會稟督憲奉飭查辦拳案。」(同上、三七二—三七二頁。)

(11) 「庚子四月十九日、院委張毓渠、揚雲峯、電稟督憲拳匪情形」、「四月二十四日、飛稟督・藩・臬憲、因楊分統陣亡請添兵策應。」(同右、三七五—六頁。)

(12) 祝市「庚子五月初二日稟督憲請力主嚴辦拳匪稿」(同右、三七七—三七九頁)、楊慕時「四月二十九日上聿功亭軍門書」、同「五月初二日致廷藩台臬台電」、同「五月初三日再上聿軍門書」(「庚子剿辦拳匪文錄、三三五—三三六頁。)

(13) 楊慕時、「五月初四日三上聿軍門書」(同右三三九頁。高碑店においてすでにそうであつた。「忽遠望有十四五歲之兒童數十名、兩邊百姓亦夾住鐵道觀看、正令人向前驅逐、此來彼去、直同兒戲。上海之火、已延燒而下、勢不可不用武、而是匪是民、無從分別、……即放槍三排、該匪死傷十餘人、始四路逸去。慕時當追逐逸匪、隨去隨散、盡入村莊……惟二十九夜之舉、外人不察當時事機、易生議論、死傷十餘人、外人以爲殺百姓、慕時以爲殺匪……」(「五月初三日再上聿軍門書」三三八頁。)[百姓]と「匪」との區別が困難なのは當然であつた。それは事實重復してゐただから。楊慕時の出した示諭、「四月二十九日示諭義和團」、「五月初三日示諭涿州至定興鐵道傍各村」、「五月初四日高碑店第三次六言示。」(同上三三五、三三七、三四〇頁。)

最後のものは六言詩形を取つてゐる。これ又義和拳の衆中に文字ある者の存在を豫想しての處置と言ふべきであらう。

(14) 「節錄某大令自京來函」(佐原篤介、「拳亂紀聞」所收、「義和團」、第一冊、二五一頁。)

(15) 楊慕時、「五月初七日四上聿軍門書」、「五月初八日五上聿軍門書」、前掲、三四一頁、三四四頁。

(16) 楊慕時、「五月初十日六上聿軍門書」、三四六頁。

(17) 「附、孫壽卿統領來函、五月十二日酉刻所信」、同上、三四八頁。

(18) 楊慕時、「五月十二日上剛相書、十二日交。」三四八—九頁。

(19) 「附、剛相剖文」、同右、三四九頁。

(20) 「附、榮相剖文、五月十五日發十六日奉到。」、三四九—三五〇頁。

(21) 「附、裕師來電、五月十六日下午發。」

(22) 實錄、光緒二十六年四月三日、十一日、十九日、二十二日、二十六日（一九〇〇年五月一日、九日、十七日、二十日、二十五日）、五月二日、三日、十二日（五月二十九日、三十日、六月八日）等々條。

(23) 實錄、五月三日（五月三十日）條の上諭にも言う。「諭軍機大臣、電寄裕祿、拳匪滋事、琉璃河・長辛店一帶車站局廠、均被焚毀。亟應懲前毖後、認真彈壓、著裕祿、飭令蔣士成、將盧保・津盧兩路電線鐵道、專派隊伍、妥爲保護、毋任再有疎虞、是爲至要」。

(24) 實錄、同日條。本節註十三に舉げた、楊慕時の民命についての配慮を参照せよ。

(25) 前掲、楊慕時「庚子勦匪電文錄」、「六月初九致營務處張毓渠觀察書」同上、三五一頁。